尾張元興寺跡

-第19次発掘調査報告書-

２０２４
安西工業株式会社

尾張元興寺跡

- 第 19 次発掘調査報告書 -

２０２４

安西工業株式会社

例　言

1．本書は、愛知県名古屋市中区正木四丁目 903 番において実施した尾張元興寺跡第 19 次発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、集合住宅建築工事の事業主体者であるエスリード株式会社の依頼により、名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室（現：文化財保護課）の指導・監督のもと、安西工業株式会社が調査主体者となり実施した。

3．発掘調査の面積は、353.5㎡である。

4．発掘調査の期間は、発掘・整理を含め令和５年 10 月２日から令和６年 10 月 31 日である。

5．発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制で実施した。

監督員	岡　千明（名古屋市教育委員会）
調査員	河内一浩、山下隆次 (安西工業株式会社)
測量	榊　孝浩、鈴木敏雄（安西工業株式会社）
調査補助員	大西由朗（安西工業株式会社）
整理員	野田宏美、河内暁美、岩本めぐみ（安西工業株式会社）

6．遺物の注記は、元 19 次 - ○○とする。○○は遺物台帳の登録番号である。

7．遺構番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、番号の前に遺構の種類を記した。遺物番号については種別ごとに分け、通し番号を付した。なお、挿図の遺物番号と写真図版の遺物番号は一致する。

8．本書では遺構の種別を以下の記号と一連の番号の組合せにより標記する。
SI（竪穴建物）、SB（掘立柱建物）、pit（柱穴）、SD（溝）、SK（土坑）

9．使用地図は、名古屋都市計画基本図（縮尺１：5,000　令和２・３年度測量）、名古屋都市計画基本図（縮尺１：2,500　令和２年度測量）尾頭橋、国土地理院　地理院地図（GSI Maps）である。標高はＴ．Ｐ.(東京湾平均海面高度)、方位及び座標は平面直角座標系　第Ⅶ系（世界測地系 2011）に基づく。使用土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版　標準土色帖』を用いた。

10. 本書の執筆は、第１章（１）を林　順（名古屋市教育委員会）、その他は河内（一）が行った。遺構のほか現場図面は大西が実測した。土層図・遺構図は画像に基づき河内（一）が作成した。遺物実測図作成は河内（一）のほか野田宏美、河内（暁）が作成し、遺構・遺物のトレース並びに報告書の図版作成は河内（暁）が行った。本書に使用の遺構写真は山下が、遺物写真は河内（一）　が撮影した。編集は市教育委員会の指導により河内（一）が行った。

15. 本調査に関わる記録図面、写真、遺物などは、すべて名古屋市教育委員会で保管している。

16. 出土品整理、および本書の作成に当たり下記の方からご教示を賜りました。
佐藤公保、武部真木、服部哲也 (五十音順・敬称略)

目　次

第１章 はじめに ……1(林・河内)
（１）調査に至る経緯……1
（２）名古屋市教育委員会の立会調査……2
（３）調査の経過……3
第２章 位置と環境……4(河内)
（１）地理的環境……4
（２）歴史的環境……4
（３）尾張元興寺跡の過去の調査……7
第３章 遺構……14(河内)
（１）基本層序 ……14
（２）遺構の概要……14
（３）Ⅰ区の遺構……18
１面の遺構……18
２面の遺構……20
（４）ⅡＡ区の遺構……22
１面の遺構……22
２面の遺構……24
（５）ⅡＢ区の遺構……27
第４章 主な遺物……33(河内)
（１）遺物の概要……33
（２）Ⅰ区の遺物……33
１面の遺物 ……33
２面の遺物……36
（３）ⅡＡ区の遺物……38
１面の遺物……38
２面の遺物……39
（４）ⅡＢ区の遺物……39
２面の遺物……40
（５）出土瓦……43
平瓦……43
丸瓦……47
鴟尾……47
軒瓦……48

第５章　まとめ……54(河内)
第６章　論考……55(河内)
（１）佐屋街道と尾張元興寺跡…… 55
（２）いわゆる「尾張元興寺跡」という遺跡について…… 56

図版目次

図版１　遺構
１．Ⅰ区１面検出状況（南西から）　２．Ⅰ区１面全景（南西から）
３．Ⅰ区１面礎石検出状況（北から）　４．Ⅰ区１面土間検出状況（北東から）
５．Ⅰ区１面 SK01 近景（東から）　６．Ⅰ区１面 SK02 近景（南から）
７．Ⅰ区１面 SK03 土層断面（南から）　８．Ⅰ区１面 SK04 土層断面（東から）

図版２　遺構
１．Ⅰ区２面全景（北から）　２．Ⅰ区２面全景（南西から）
３．Ⅰ区２面 SD101 土層断面（西から）　４．Ⅰ区２面 SK101 近景（南西から）
５．Ⅰ区２面 SI101 近景（東から）　６．Ⅰ区２面 SI101pit111 遺物出土状況（東から）
７．Ⅰ区２面 SI102 近景（北西から）　８．Ⅰ区２面 SI102 近景（南東から）

図版３　遺構
１．ⅡＡ区１面検出状況（南から）　２．ⅡＡ区１面全景（北西から）
３．ⅡＡ区１面 SD01 近景（東から）　４．ⅡＡ区１面 SD01 近景（南東から）
５．ⅡＡ区１面 SD01 全景（北から）　６．ⅡＡ区１面 SD01 近景（西から）
７．ⅡＡ区１面 SD01 全景（南から）　８．ⅡＡ区１面 SD01 土層断面（西から）

図版４　遺構
１．ⅡＡ区２面垂直写真（左が北）　２．ⅡＡ区２面全景（南から）
３．ⅡＡ区２面 SI101 近景（南から）　４．ⅡＡ区２面 SI101 近景（西から）
５．ⅡＡ区２面 SI102 近景（西から）　６．ⅡＡ区２面 pit38 土器出土状況（南から）
７．ⅡＡ区２面 pit30 断面（南東から）　８．ⅡＡ区２面 pit30 土器出土状況（南東から）

図版５　遺構
１．ⅡＢ区２面垂直写真（左が北）　２．ⅡＢ区２面全景（北西から）
３．ⅡＢ区２面全景（南西から）　４．ⅡＢ区２面全景（北から）
５．ⅡＢ区２面 SI104 近景（東から）　６．ⅡＢ区２面 SI104 近景（南東から）
７．ⅡＢ区２面 SI105 近景（北東から）　８．ⅡＢ区２面 SI107 近景（東から）

図版６　遺物

1．Ⅰ区１面 SK01
2．Ⅰ区１面 SK01
3-a.　Ⅰ区１面 SK01
3-b.　Ⅰ区１面 SK01
4-a.　Ⅰ区１面 SK01
4-b.　Ⅰ区１面 SK01
5．Ⅰ区１面 SK02
6．Ⅰ区１面 SK02

図版７　遺物

7．Ⅰ区１面 SK02
8．Ⅰ区１面 SK02
9．Ⅰ区１面 SK02
10．Ⅰ区１面 SK02
11．Ⅰ区１面 SK02
12．Ⅰ区１面 SK03
13．Ⅰ区１面 SK03
14．Ⅰ区１面 SK03

図版８　遺物

15．Ⅰ区２面 SI101
16．Ⅰ区２面 SI101
17~22．Ⅰ区２面 SI102

図版９　遺物

24~28　Ⅰ区２面 SI102

図版１０　遺物

29~33．Ⅰ区２面 SK102
34~42．ⅡA区１面 SD01

図版１１　遺物

43．ⅡA区２面 pit64
45．ⅡA区２面 pit38
44．ⅡA区２面 pit30
46．ⅡA区２面 pit44
48．ⅡB区２面 SD103
51．ⅡB区攪乱
52．ⅡB区包含層
53．ⅡB区包含層

図版１２　遺物

60~63・65・67．ⅡB区２面 SI104
75~77・85~90．ⅡB区２面 SI104

図版１３　遺物

78~84．ⅡB区２面 SI104

68. ⅡB区2面SI104
64・70. ⅡB区2面SI104
66. ⅡB区2面SI104
69・71~74. ⅡB区2面SI104

図版14　遺物
93~95. 平瓦(斜格子・格子タタキ)
97~99. 平瓦（ヘラケズリ）
102. 平瓦（花文タタキ）
104. 丸瓦（平行タタキ）
91・92. 平瓦（平行タタキ）
100・101. 平瓦（縄タタキ）
105~107. 丸瓦（斜格子・格子タタキ）
108. 丸瓦（縄タタキ）

図版15　遺物
109. 丸瓦（縄タタキ・ナデ消し）
111. 軒丸瓦Ⅴa型式（ⅡB区2面SD103）
112. 軒丸瓦Ⅶ型式
114. 軒平瓦 型式不明
110. 軒丸瓦Ⅲ型式
113. 軒平瓦Ⅲ型式（ⅡB区包含層）

挿図目次

図1　尾張元興寺跡の範囲と調査地位置図 (1:5,000)…… 1
図2　トレンチ位置図と出土遺物…… 2
図3　発掘前の現状写真(北から)…… 3
図4　調査区配置図 (1:1,000)…… 3
図5　熱田台地の地形図（註3を元に作成）…… 4
図6　佐野街道道標 …… 5
図7　古渡遺跡群・新尾頭1丁目遺跡分布図 (1:5,000)…… 6
図8　尾頭塚石碑…… 7
図9　尾張元興寺跡周辺地籍図（註23を元に作成）…… 8
図10　尾張元興寺跡既往の調査位置図 (1:2,500)…… 9
図11　Ⅰ区南壁・西壁土層断面図（1：40）……15
図12　ⅡA区西壁土層断面図（1：60）……16
図13　ⅡB区東壁土層断面図（1：60）……17
図14　Ⅰ区1面遺構土層断面図（1：40）……18
図15　Ⅰ区1面遺構平面図（1：50）……19
図16　Ⅰ区2面SI102平面・断面図（1：40）……20
図17　Ⅰ区2面遺構平面図（1：50）……21
図18　ⅡA区1面SD01東壁（西から）……22
図19　ⅡA区1面SD01土層断面図（1：40）……22

図 20　ⅡA区１面遺構平面図（1：80）……23
図 21　ⅡA区２面 pit30・38 断面図（1：40）……24
図 22　ⅡA区２面遺構平面図（1：80）……25
図 23　ⅡA区２面 SI101 平面・断面図（1：50）……26
図 24　ⅡB区２面 SD103 断面図（1：40）……27
図 25　ⅡB区２面遺構平面図（1：80）……28
図 26　ⅡB区２面 SI103 平面・断面図（1：50）……30
図 27　ⅡB区２面 SI104 平面・断面図（1：50）……31
図 28　ⅡB区２面 SI105 平面・断面図（1：50）……32
図 29　Ⅰ区１面 SK02 出土の石硯……34
図 30　Ⅰ区１面出土遺物（1：4）……35
図 31　Ⅰ区２面 SB101pit116 出土土師器……36
図 32　Ⅰ区２面出土遺物（1：4）……37
図 33　ⅡA区包含層・排土の銭貨……38
図 34　ⅡA区１面 SD01 出土遺物（1：4）……38
図 35　ⅡA区２面出土遺物　（1：4）……39
図 36　ⅡB区２面出土遺物（1：4）……40
図 37　ⅡB区２面 SI103 出土遺物（1：4）……40
図 38　ⅡB区２面 SI104 出土遺物（1：4）……42
図 39　平瓦実測図（1）（1：4）……44
図 40　平瓦実測図（2）（1：4）……45
図 41　丸瓦実測図（1）（1：4）……46
図 42　丸瓦実測図（2）（1：4）……47
図 43　出土鴟尾……47
図 44　軒丸瓦・軒平瓦実測図（1：4）……48

表目次

表１　尾張元興寺跡調査一覧表……10～13
表２　遺構概要表……14
表３　遺物概要表……33
表４　遺物観察表……49～53

第１章　はじめに

（１）調査に至る経緯

今回の調査は、エスリード株式会社（以下、事業者）が名古屋市中区正木四丁目 903 番に計画した集合住宅の建設工事による事前の発掘調査である。当地は尾張元興寺跡の埋蔵文化財包蔵地に該当する。

令和４年５月 18 日に、当該地における既設建物の解体工事に伴って、名古屋市教育委員会（以下、市教育委員会）が立会調査を行った。調査の結果、敷地内に設定した全てのトレンチで古墳時代～中世の遺物包含層・遺構・遺物を確認した。

令和５年７月 20 日には、集合住宅建設工事について、事業者から文化財保護法第 93 条第１項に基づく届出が市教育委員会に提出された。当該事業が遺跡に与える影響が大きいと判断されたため、市教育委員会は同年７月 25 日付教文第４-135 号で発掘調査を通知した。発掘調査については事業者、安西工業株式会社、市教育委員会の三者において協定を締結、文化財保護法第 92 条第１項に基づく届出を愛知県県民文化局に提出した。９月５日付文芸第 966 号にて受理通知を受けたため、10 月 10 日から調査を開始した。

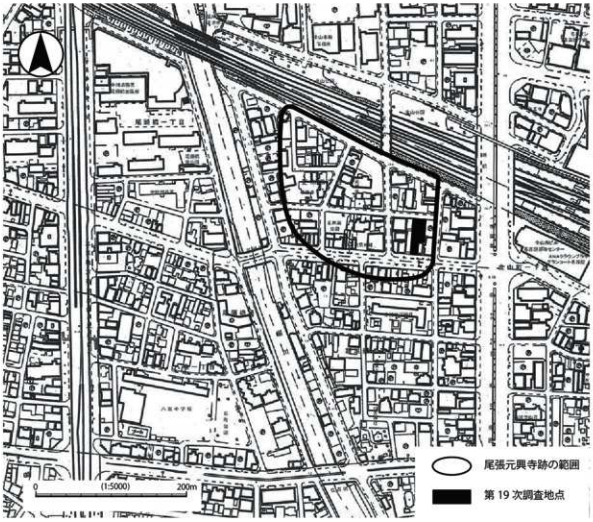


図１　尾張元興寺跡の範囲と調査地位置図 (1:5,000)

（2）名古屋市教育委員会の立会調査

当該地において令和4年5月18日に、既設の建物解体工事にあたり市教育委員会が立会調査を実施した。敷地内の西側に南北方向のトレンチを3ヵ所設定し、南から1トレンチ、北を3トレンチと呼称した。敷地内の東側においては南北方向のトレンチ2ヵ所を設定し、南が4トレンチ、北を5トレンチと呼称した（図2左）。以下、トレンチの規模と出土遺物の概略を述べることとする。

1トレンチは、東西1.5 m、南北3.0 mで、遺物は近世陶器の図2-1の壷口縁1点のみである。

2トレンチは、東西1.0 m、南北2.7 mで、3層からは図2-3の近世陶器、4層から土師器片が出土した。図2-2は素焼きの陶器で外面に赤色顔料を塗布している。排土からの採集品である。

3トレンチは、東西1.0 m、南北3.5 mで、2層からは古墳時代の土師器と須恵器の小片が出土した。今回調査したⅡA区のSI101の遺物と考えられる。

4トレンチは、東西1.2 m、南北3.0 mで、古瓦片が数点ある。近世陶器が出土している。図2-4は、18-19世紀の瀬戸・美濃系施釉陶器水甕である。ⅡB区にあたり、SD103を確認している。

5トレンチは、東西1.2 m、南北2.4 mで、ⅡA区にあたる。3層から須恵器片、4層から土師器片が出土した。

以上が、立会調査の結果である。

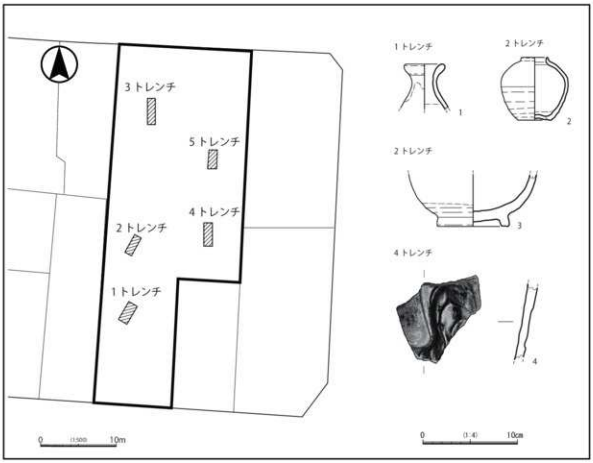


図2　トレンチ位置図と出土遺物

(3) 調査の経過

調査区は、開発予定地に２ヵ所調査区を設け、便宜的に南側をⅠ区(南北6.5 m、東西7.5 m)、北側をⅡ区(南北26.5 m、東西11.5 m)とした。総面積353.5㎡を測る。

図３　発掘前の現状写真(北から)

調査に先立ち令和５年10月２日から草刈りや立入防止柵設置等の準備工事を行った。発掘は、排土置き場の関係からⅡ区を南北に二分し、北半部をⅡA区(145.5㎡)、南半分をⅡB区(159.25㎡)とした。調査は、Ⅰ区の機械掘削を令和５年10月10日から実施し、続いてⅡA区の機械掘削を令和５年10月16日から実施した。両調査区の調査終了後、反転して令和５年11月22日からⅡB区の調査に入った。

調査中は適宜、市教育委員会の指導を受けた。発掘調査は、令和５年12月25日に終了した。

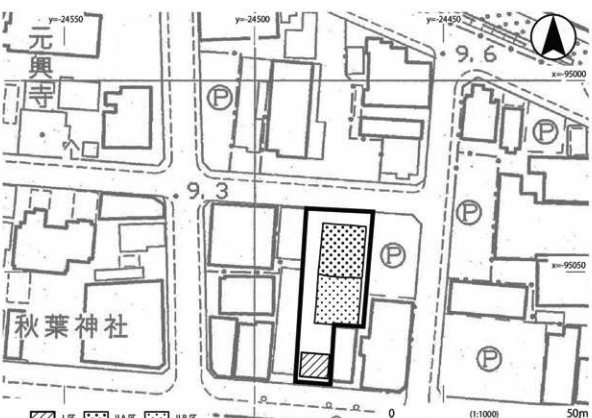


図４　調査区配置図（1：1,000）

第２章　位置と環境

（１）地理的環境

尾張元興寺跡は、名古屋市中区正木四丁目に位置する。一部が名古屋市熱田区新尾頭一丁目に含まれる。周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は、東西約 250 m、南北 200m で、正木四丁目のほぼ全域にあたる。

遺跡は、熱田台地と呼ばれる標高 10m～15m の南北に長い台地の西側縁、標高８m 付近に立地する。中位段丘面にあたり、熱田面とも呼ばれている。また、洪積層である熱田層は、下部から上部に向かい砂層・海成粘土層・粘土層をレンズ状に挟む砂層から構成されている。熱田台地は、地区によりさらに細分されることがあり、大曾根凹地を挟んだ西は名古屋台地、東は千種台地、瑞穂区あたりは瑞穂台地、笠寺観音が所在する笠寺台地と通称される [1]。

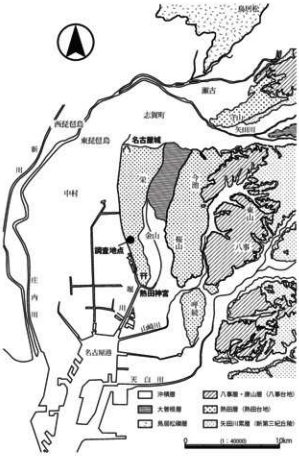


図５　熱田台地の地形図（註３を元に作成）

熱田台地の西側には、沖積面が発達し、標高１～４m の沖積低地が広がっている。この沖積低地は、木曽川や庄内川などの河川が運んだ土砂の堆積によって形成されたものである。沖積低地と尾張元興寺跡の比高差は、およそ６m である。

熱田台地の北西端に名古屋城が、南西部には熱田神宮が位置する。熱田台地の標高は北部が高く、名古屋城や名古屋市役所の付近で標高約 15m、南西部に向かって緩やかに下っており、熱田神宮付近では標高約７m を示している。ＪＲ東海道本線と名鉄名古屋本線の横断する金山駅の掘割辺りを境に、北側を名古屋台地、南側は狭義の熱田台地と呼ぶことがある [2]。

（２）歴史的環境

尾張元興寺跡は、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。また佐屋街道沿いに位置するため江戸時代の遺構も残されている。

古渡遺跡群（正木遺跡群とも称されている）は尾張元興寺跡と時期や性格が類似していることから一つの遺跡群として捉えられている [4]。この遺跡群は尾張元興寺跡をはじめ、伊勢山中学校遺跡・正木町遺跡・金山北遺跡・東古渡町遺跡・古沢町遺跡で構成される。古渡遺跡群では、古墳時代中期に集落の形成が始まり古代まで継続し、官衙的性格が強い集落群と捉えられている [5]。その

理由として、7 世紀から 8 世紀にかけて主に官人層が使用したとされ、地方では国衙・郡衙等の官衙関連遺跡で出土の多い「畿内系」の暗文土器が確認されていることがあげられる[6]。さらに、尾張元興寺跡の北に位置する正木町遺跡では 7 世紀から 8 世紀の総柱建物群[7]や礎石建物が検出され、平城京や斎宮などわずかな例しかない羊形硯[8]が発見されている事実も、その官衙的性格の強さを裏付けるという。

図 7 は尾張元興寺跡を含む古渡遺跡群の分布を表したものである。各遺跡の検出遺構や出土遺物の概略を述べる。

伊勢山中学校遺跡は、昭和 62 年（1987）の第 4 次調査で戦国期の「薬研堀」の大溝 (幅 5 m、深さ 3.4m) が確認されている[9]。また、第 5 次調査では、古墳時代の鉄鋌が出土している[10]。

正木町遺跡でも、古墳時代の鉄鋌が出土していることが、藤井康隆の再検討により紹介されている[11]。また、古墳時代と考えられる溝の埋土から陶馬が出土している[12]。

古沢町遺跡は、昭和 44 年（1969）に地下鉄工事で弥生時代の遺物が出土し、その後の調査で古墳時代の竪穴建物や古墳の周濠と考えられる溝が検出されている[13]。

金山北遺跡の調査では、竪穴建物以外に古墳の周濠と考えられる溝も検出されている。そのほか、7 世紀から 8 世紀の鍛冶関連遺物が出土している点に注目したい[14]。中世には金山の地は、「尾張鍛冶発祥の地」とも称され、中世から近世には刀剣や鍔などの職人が共住していたという。東古渡町遺跡においては、埴輪を伴う古墳の痕跡の検出が特筆される[15]。出土した埴輪は、家形や朝顔形埴輪の破片のほか、全体が分かる円筒形埴輪がある。円筒形埴輪は、いずれも窖窯焼成によるもので、2 突帯 3 段の規格を呈する。外面調整は、一次調整のタテハケを施したのち、回転ヨコハケによる二次調整を施している。5 世紀後半に位置づけられている。尾張元興寺跡においても第 6 次調査で円筒形埴輪片が出土している[16]。また第 10 次調査の報告書においても、埴輪片の出土の記述がある[17]。

図 6　佐屋街道道標

以上が古渡遺跡群の概略であるが、次に新尾頭 1 丁目遺跡について述べる。

新尾頭 1 丁目遺跡は、尾張元興寺跡第 16 次調査により、弥生～古墳時代の集落が南に広がることが確認されたため平成 30 年（2018）に新規追加された遺跡である[18]。令和 3 年（2021）に実施された発掘調査では、方形周溝墓の可能性がある溝の検出や幕末から近代にかけての佐屋街道沿いの町屋が確認された[19]。

第 19 次発掘調査地の南側道路は、江戸時代に開いた佐屋街道にあたる。佐屋街道は渡海を避け、陸路で熱田宿から佐屋宿までを繋いだ。金山新橋南の交差点の南西

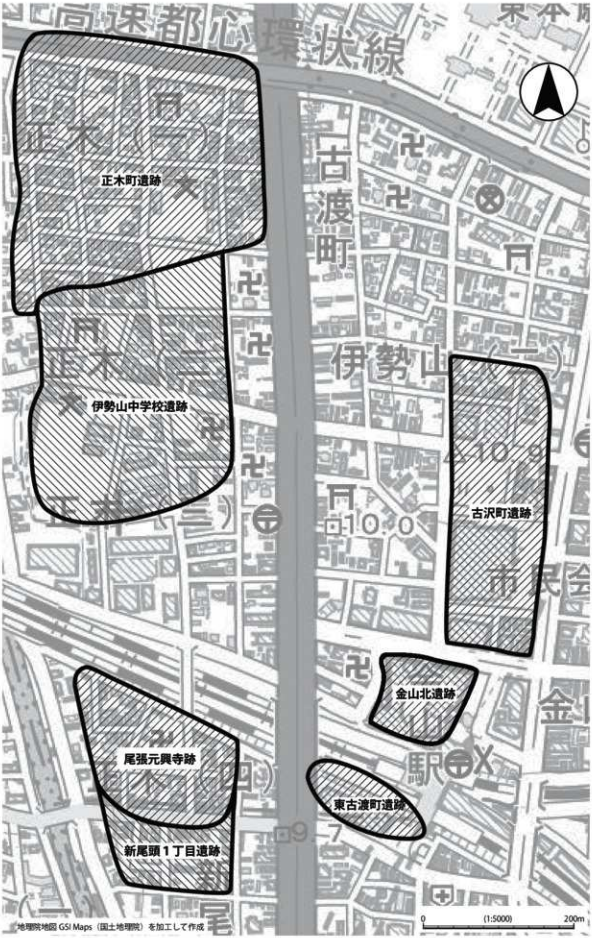


図７　古渡遺跡群・新尾頭１丁目遺跡分布図（1：5,000）

には、文政 4 年 (1821) の銘がある道標が現存する (図 6)。近世においては、佐屋街道の北が名古屋城下 (古渡村)、南が熱田であった[20]。

佐屋街道は、明治になっても明治天皇の往来に使用されたが、明治 5 年 (1872) 新東海道が定められると、熱田神宮以西が佐屋街道より海寄りの陸路に変更され、その歴史を終えた。

中区正木四丁目に国豊山元興寺があるが、その北西に「尾頭塚」と刻まれた石碑が存在する（図 8)。これは、「古渡り七塚」[21] の一つである。7 基の塚名は下記のとおりで、いずれも現状では古墳とみなすことはできない。

義次塚　今失其所或云泰雲寺境内
為朝塚　元興寺裏畑にあり
山伏塚　新町裏にあり
鎧塚　　闇森の内にあり
か子塚　同畑中にあり
片葉塚　東田面の内にあり
カマの神塚　東田面野田と云田中にあり

図 8　尾頭塚石碑

このうち為朝塚が、「尾頭塚」に該当する。なお、『尾張名所図会』には元興寺の北に「黄金塚」と記している。時代によって名称が異なることが、文献史料などからわかる。なお、七塚の "義次塚"、は、元興寺の東隣にあった泰雲寺に存在したようで、両塚は近接していた[22]。　塚ではないが、熱田区花町一丁目の畑中地蔵は、畑に突き出た石を「畑中地蔵菩薩」としてお祀りしたのが最初といわれているが、文政 5 年（1822）に樋口好古が著した『尾張徇行記』にも紹介されている。また、同じ場所に、かつて堀川に架かっていた新橋 (現在の尾頭橋) の脇に、元文 3 年（1738）に建てた供養塔が移築されている。

（3）尾張元興寺跡の過去の調査

尾張元興寺跡は、「その出土瓦などから 7 世紀中葉から第 3 四半期に造営された尾張地域における寺院とされる。畿内との瓦の同笵・同文関係も多岐にわたることから中央との強いつながりをもった有力氏族により造営されたと考えられ、尾張氏との関わりも指摘されている」[23] とされている。

尾張元興寺に関する史料は『日本紀略』[24] の元慶 8 年（884）8 月 26 日甲寅の条に「勅令して尾張国愛智郡定額願興寺を国分金光明寺となす。本金光明寺災火焼損縁なり」とあり、9 世紀後半、愛智郡には焼失した国分寺の機能を託された定額「願興寺」があったことがわかる。また『金鱗九十九之塵』には「天暦・天徳年間（947 ～ 961）釈浄蔵願興寺に住す」との記載がみられる。

寺では尾張元興寺の創建について『日本霊異記』[25] の道場法師伝、即ち有名な元興寺の鬼の話

と結び付けて説き、敏達天皇の時代に道場法師によって創建されたとしている。敏達天皇の時代および道場法師の創建については信頼できない。しかし、このような説話成立の背景には、愛智郡出身で大和で活躍し実在した僧の存在が隠されている可能性もある。『尾張名所図会』[26] に道場法師の説話が載せられている。道場法師が、出生地である当地に帰り、奈良の元興寺の支院として建立したとの伝承が残されている。

この地に、大寺があったことは江戸時代には知られていたようで、『瓦礫舎古瓦譜』に見られる拓影から瓦が採蒐されていたことも窺える[27]。余談であるが、この収集された瓦については瓦礫舎（朴厳祖淳：桜天神社霊岳院住僧）によって、大阪府羽曳野市の野中寺の瓦と同范であると指摘されている。

尾張元興寺跡の遺跡範囲に今も存在する「元興寺」から南西 1.5㎞の名古屋市中川区牛立町には「願興寺」という寺があり、中区正木四丁目から戦国時代に移転したという沿革をもつ。発掘調査で「願興寺」そのものを示す資料が見つかっているわけではない。

現在の「元興寺」は享保 3 年（1718）に知恩院の末寺国豊山元興寺として建てられたものである[28]。

学術的には、昭和元年（1926）、石田茂作ほかにより調査が行われている[29]。当時すでに付近には土壇や礎石は存在せず、寺院跡の範囲確認をすることは困難な状況であった。石田は元興寺および西隣の泰雲寺の所有地に注目し、両寺所有地の東西と南北に走る道を手がかりに、東西幅 60 間余りの往時の尾張元興寺の寺域を想定した（図 9）。

昭和 27 年（1952）に名古屋大学の佐々木隆美教授らによって小規模の発掘調査が行われた。その成果については未報告である[30]。翌年には道路工事により瓦を含む包含層が露呈、高校生が瓦片を採集している[31]。

図 9　尾張元興寺跡周辺地籍図（註 23 を元に作成）

名古屋市による緊急調査は、昭和 55 年（1980）に、正木南公園の北西隅（図 10 の A）で実施された [32]。その後同市の見晴台考古資料館が昭和 59 年（1984）5 月に発掘を行った。これが尾張元興寺跡の第 1 次発掘調査となる [33]。

その後発掘は続くものの、寺院の痕跡が見出せない状況であったが、平成 11 年（1999）に行われた尾張元興寺跡第 7 次調査で地面に突き刺さった水煙が確認された。これによって、塔跡の位置が推定された [34]。

註

[1] 新修名古屋市史資料編編集委員会 2013『新修名古屋市史資料編自然』名古屋市

[2] 新修名古屋市史資料編編集委員会 2008『新修名古屋市史資料編考古 1』名古屋市

[3] 名古屋大都市圏研究会 2011『図説名古屋圏』古今書院

[4] 藤井康隆 2008「第 2 章主要遺跡概説第 3 節古墳時代の遺跡　古墳 -44 古渡遺跡群」『新修名古屋市史資料編考古 1』名古屋市

[5] 深谷淳 2013「第 1 章総論第 3 節　古代の名古屋 2 古代寺院の造営」『新修名古屋市史資料編考古 2』名古屋市

[6] 服部哲也 2001「東古渡町遺跡出土の古代土器」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第 3 号

[7] 名古屋市見晴台考古資料館 1996『正木町遺跡 - 第 5 次調査の概要』名古屋市教育委員会

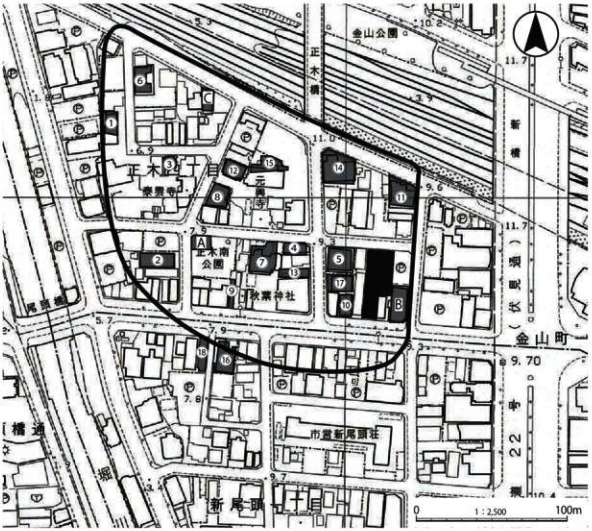


図 10 尾張元興寺跡既往の調査位置図 (1:2,500)

表１　尾張元興寺跡調査一覧表

	調査地点		縄文	弥生	古墳	古代
A	公園地点	遺物			須恵器蓋	瓦
①	1次調査	遺構				
		遺物			須恵器、土師器	瓦、須恵器、土師器、灰釉陶器
②	2次調査	遺構			SB01(周溝・貼床)、SD01(瓦含まず)	SK01(瓦だまり)
		遺物			須恵器(7世紀前半代、H50型式)、土師器、土錘	瓦、鎬尾、須恵器、土師器、灰釉陶器(K-14号窯式～K90号窯式(10世紀前葉))、多口瓶(K-14号窯式)
③	3次調査	遺構				
		遺物			須恵器、土師器	瓦、須恵器、土師器、灰釉陶器
④	4次調査	遺構				SK01・02・04・05(瓦だまり、須恵器、土師器を含む)
		遺物			須恵器、土師器、円筒埴輪	瓦、須恵器、土師器
⑤	5次調査	遺構			SB01～06	SD01
		遺物		弥生土器	土師器、須恵器	瓦、須恵器、土師器、灰釉陶器
⑥	6次調査	遺構			SD02(溝)、SD03、小土坑	SX01(構造不明)、小土坑
		遺物	縄文土器	弥生土器	須恵器、土師器、埴輪	瓦、須恵器、土師器
⑦	7次調査	遺構	ピット10基ほど(古代瓦含まない)。調査区北西部に集中する傾向			大規模な瓦だまり中心。調査区北東部に広がる SK11(古代末頃の埋没か。瓦片大きく、2次的移動少ないか。 下層には古代瓦がほとんど含まれない。古代の須恵器・土師器) SK14(瓦廃棄土坑。瓦だまりの中では最も新しい掘削。坑底には古代瓦が充填。瓦片小さ(2次的移動の可能性。宝相華紋軒丸瓦。古代の須恵器・土師器僅か) SK17・21(SK14に切られる。下層は古代瓦まばら。水煙)
		遺物	晩期深鉢1点	弥生土器僅か	土師器、移動式カマド	須恵器、灰釉陶器、瓦
⑧	8次調査	遺構	貝層1、SK09	SK09	SB01(壁溝、炉跡、主柱穴(P4・48・66・150)、 約4.4m四方) SK10、SK11、P8、P42、P82、P22、P52、P140、P168、貝層1～3	SK01、SK02、SK08、SK09 (調査区北側に集中)
		遺物	縄文土器(貝層1、SK09)	弥生土器(SK09)	須恵器、土師器、韓式系土器、石製模造品の曲玉	瓦、灰釉陶器
⑨	9次調査	遺構			SX01(溝状遺構、下層は瓦を含まない)	SX03
		遺物		弥生土器	須恵器、土師器	瓦
⑩	10次調査	遺構			SB03(5世紀後半、H111号窯期、主柱穴P70、 P116)	SK21、SK23、SK7、SK30、SB01、SB02、SX01、SB04、 SB06、 SK29
		遺物		弥生土器	須恵器、土師器、鈴鐘	瓦、須恵器、土師器、灰釉陶器、須恵器円面硯
⑪	11次調査	遺構		SK46(SK47)(方形周溝墓となる可能性)、(SK48、SK50)		
		遺物		バレススタイル土器(竪穴式初め)		瓦、須恵器、灰釉陶器
⑫	12次調査	遺構				
		遺物	縄文土器	弥生土器	初期須恵器(5世紀)、須恵器、土師器	瓦、土師器、須恵器・土管(7世紀後半)、灰釉陶器(9世紀頃、赤瓶片)
⑬	13次調査	遺構				瓦だまり
		遺物		弥生土器		瓦
B	パスコ調査	遺構			SB01(古墳時代中期) SB02(6世紀後半～7世紀前半の遺物、主柱穴P108・107・75・25、下層にSB02以前のピット1基、溝2条、土坑2基) SB03(3世紀後半か、SK10は貯蔵穴の可能性、墳土) SB04(4～5世紀か、周溝、主柱穴P89・61・84・83、墳土) SB05(周溝、主柱穴P50・118・78・81、墳土、SK09は貯蔵穴の可能性) SB06(周溝、時期不明) SB07(主柱穴P27・54、4～5世紀か) SK13(湿見層)	
		遺物		弥生土器	須恵器、土師器、石玉	瓦、須恵器、土師器
⑭	14次調査	遺構			SB01(古墳時代後半頃) SB02、SB03(古墳時代か) SB04 P251・252・72・106 SK01	SK03・07 SD01 SD06(6世紀後半代) SD07
		遺物		弥生土器	須恵器、土師器、土錘、紡石	瓦、鎬尾、須恵器
C	イビソク調査	遺構				
		遺物	縄文土器		須恵器、土師器	瓦、移動式竈
⑮	15次調査	遺構			SK050(古墳時代早期)	SB1(SK011・SK018・SK022・SP038) SK009 SK010 SK011 SK018(奈良時代以降) SK022(奈良時代以降) SP038(奈良時代以降) SA1(SP003・SP016・SK024)(奈良時代以降) SK004～SK008(奈良時代以降) SK030(奈良時代以降) SK035(奈良時代以降) SK048(奈良時代以降) SK051(奈良時代以降)
		遺物		バレススタイル土器	須恵器、土師器、土錘、紡石	須恵器、土師器、瓦、埠、土製勾玉、甑取手

中世	近世	近代～
	SD01(瓦、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗近世陶器) SK22等	
山茶碗、中世陶器	近世陶器	
SK05 常滑製の中皿、山茶碗小皿		
	据り込み、瓦穴	
	埋瓦	
	SK03	防空壕
SD02、瓦だまり(古代瓦は2次的な廃棄)		
陶磁器		
SD01、SX02(瓦だまり)、小土坑		
山茶碗、古瀬戸		
SK34(下位部分がオーバーハング、貯蔵穴の可能性、中世～近世 初頭) P108(下位部分がオーバーハング、SK34同様貯蔵穴の可能性。 時期も同時期) SK41・42(北側に降り口の階段、中世～近世の貯蔵穴) SK26(土壙墓、西面北頭位の屈葬、直葬、副葬品なし、埋土中に中世山茶碗、中世末～近世前半、1体以外の骨の混入)	SK01・03・09(大土坑群、江戸後期に掘削された穴蔵か SK01・03は幕末頃埋没 SK09は太平洋戦争後埋没 建物跡(川原石を礎石、江戸後期以降) 祭および遠(明治17年の地籍図に一致する道と祭の柱列)	
中世陶器	陶器・磁器・陶始炉付(椀・皿・徳利・水滴・灯火具・擂鉢)、煙管	焼夷弾
SK03	埋葬施設A類(P1～3、屈葬で方形棺か 19世紀代) 埋葬施設B類(P93・108・165～167・176～178・184、仰臥屈葬で長方形棺か) 埋葬施設C類(P162・185、B類の小規模なものか) SK04、SK06、SD01、SD02	
山茶碗、施釉陶器	人骨、青永通宝、敷瓦、鉄釘、土人形、灰釉小瓶、鉄絃草文碗、ろくろ成型土師皿、瓦、輻羽口、火打ち石、近世陶磁器	
	SX02、P09(荒滑遺大墓埋設)	
山茶碗	近世陶器	
SK15(地下式壙)	SK1・4・5・6・8・9・10・11・12・13・16・17・18・19・22・24・25・26・27・28(北西部土坑群は廃棄土坑、南東部土坑群は「地下室」あるいは「穴蔵」か)、SE1	防空壕
中世陶器、山茶碗、青磁、土製羽釜、土鍋	近世陶磁器、火打ち石	陶製代用品鉢
SX01(下部がオーバーハング、14世紀代に埋没か、地下式壙か) SD01(中央部～南部は15世紀代の埋没か、北部は19世紀代の埋没か)	SK01、SK07(18世紀後半～19世紀) SK15(19世紀代か) SK18(18世紀後半～19世紀) SK20(18世紀後半か) SK21(井戸、17世紀後半～19世紀か) SK22、SK23、SK37、SK39(地下式壙か) SX03(17世紀後半頃か、地下式壙か) 東半区方形土坑	SK38(防空壕)
山茶碗、古瀬戸、青磁、土師器煮沸具、四耳壺、玉縁瓦	近世陶磁器、輻羽口	
	SK01、SK02、SK03、SK04(地下室か)、SK05、SD01、SD02、SD03、SD07、SD08、SD09、SD10、SD11	SX01、SD04
中世陶器		近代陶磁器、瓦、焼夷弾
		コンクリート施設
SD08 SK27(10次調査SK15と同様の性格の可能性)	SK29 SD02(弥生土器含む)	
山茶碗、古瀬戸、擂鉢	近世陶磁器	
山茶碗、常滑甕	近世陶磁器	
山茶碗、灰釉陶器		
		SX001、SX02
	泥面子	陶磁器、ガラス容器

	調査地点		縄文	弥生	古墳	古代
⑯	16次調査	遺構			SI015(古墳時代早期) SI029(古墳時代早期) SI036 SI037(古墳時代早期) SI040(古墳時代早期) SI041(古墳時代早期) SI053(古墳時代前期～中期) SI056(古墳時代前期～中期) SD61 SD011 SD013・SD014(古墳時代早期) SD026・SD032(古墳時代早期) 柵列(SL019・SK025・SK023・SK028・SP055・SP009)	SK035 SK038 SK039
		遺物			須恵器、土師器、臼玉	須恵器、土師器、瓦
⑰	17次調査	遺構				P034 P066 P070 P076 P104 SD06 SD07 SD11 SK02 SK05 SK07
		遺物				須恵器、土師器、瓦、土錘
⑱	18次調査	遺構		SB01 SK03	SB02 SD01 SD02 SK01 SK02？	SK04 SK05 SK06 SK07 SK08・09？ P109
		遺物		弥生土器 パレスタイル土器	須恵器、土師器	須恵器、瓦

8) 名古屋市見晴台考古資料館 2001『埋蔵文化財調査報告書 38』名古屋市教育委員会

9) 名古屋市見晴台考古資料館 1989『伊勢山中学校遺跡』名古屋市教育委員会

10) 木村光一・村本誠 1996『埋蔵文化財調査報告書 24　伊勢山中学校遺跡（第 5 次）』名古屋市教育委員会

11) 藤井康隆 2001「名古屋台地古墳時代の基礎資料(2) － 正木町遺跡第 4 次調査出土の鉄鏃 － 」『埋蔵文化財調査報告書 38』名古屋市教育委員会

12) 名古屋市見晴台考古資料館 1986『中区正木 1 丁目所在正木町遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

13) 伊藤厚史 2003『古沢町遺跡第 3 次発掘調査概要報告書』名古屋市見晴台考古資料館

14) 安田幸市・飯塚邦男ほか 2004『金山北遺跡第一次発掘調査報告書』名古屋市住宅都市局・㈱名古屋都市設備公社

15) 伊藤厚史 1992『東古渡町遺跡第 4 次発掘調査概要報告』名古屋市教育委員会

16) 須恵質の尾張系円筒形埴輪が 2 点図化されている。松原隆治・加藤真琴ほか 1997『平成 7 年度尾張元興寺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

17) 実測図は記載されていない。（木村有作 2003「尾張元興寺跡第 10 次」『埋蔵文化財調査報告書 48』名古屋市教育委員会）

18) 尾張元興寺跡第 16 次調査で、包蔵地範囲外に古墳時代の竪穴建物が確認されたことによる。

19) 纐纈茂・林田愛美 2023『埋蔵文化財調査報告書 97- 新尾頭 1 丁目遺跡』名古屋市教育委員会

20) 加藤安雄 1991『佐屋路分間延絵図：岩塚・万場・神守・佐屋・多度山』 東京美術

21) 三渡俊一郎 1986「35 古渡り七塚」『文化財叢書第 88 号　千種・東・中区の考古遺跡』名古屋市教育委員会

22) 三渡俊一郎 1986「35 古渡り七塚」『文化財叢書第 88 号　千種・東・中区の考古遺跡』名古屋市教育委員会

23) 梶原義実 2010「42　尾張元興寺跡」『愛知県史　資料編 4 考古 4　飛鳥～平安』愛知県史編さん委員会

中世	近世	近代～
山茶碗	土人形	焼夷弾
	陶磁器	

24) 黒板勝美編 1979『新訂増補国史大系　日本紀略』吉川弘文館

25) 遠藤嘉基・春日和男校注 1977『日本霊異記　日本古典文学大系 70』岩波書店

26) 全 8 巻。岡田啓 , 野口道直共著 小田切春江画天保 12 年の撰となる。1970 年に愛知県郷土資料刊行会が復刻版を刊行している。

27) 朴厳祖淳著で寛政 8 年 (1796) に刊行。復刻本は、名古屋市博物館が 1992 年に刊行。

28) 服部哲也 2010「東海最古の寺院「願興寺」」『名古屋市中区誌』中区制施行 100 周年記念事業実行委員会

29) 石田茂作 1936「尾頭元興寺」『飛鳥時代寺院址の研究』(財) 聖徳太子奉賛会

30) 三渡俊一郎 1986「37 尾張元興寺跡」『文化財叢書第 88 号千種・東・中区の考古遺跡』名古屋市教育委員会

31) 三渡俊一郎 1986「37 尾張元興寺跡」『文化財叢書第 88 号千種・東・中区の考古遺跡』名古屋市教育委員会

32) 名古屋市見晴台考古資料館 1985『中区正木四丁目尾張元興寺跡第Ⅱ次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

33) 名古屋市見晴台考古資料館 1985『中区正木四丁目尾張元興寺跡第Ⅰ次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

34) 服部哲也 2010「東海最古の寺院「願興寺」」『名古屋市中区誌』中区制施行 100 周年記念事業実行委員会

第３章　遺構

（１）基本層序 (図 11 ～ 13)

調査地は、現地表の標高が約 8.9 ～ 9.0 mである。

Ⅰ区（図 11）

Ⅰ区は、現地表面から 0.2m が表土で、その下に厚さ 0.1m のにぶい褐色 (7.5YR5/3) 砂質土が堆積する。南壁で、礎石と厚さ 0.1m の黄色 (2.5Y7/8) 粘質土が、同じレベルで確認できた。標高 8.7m で、近世陶磁器が出土する土坑が検出されることから１面とした。その下は、にぶい黄褐色 (10YR5/2) 砂質土が約 0.4m の厚さで堆積する。その下で須恵器や土師器を含む遺構が検出されるので２面とした。２面は、黄橙色 (10YR8/8) 粘土の基盤層で、その上面の標高は、8.5 ～ 8.3m である。

ⅡA区（図 12）

ⅡA区は、現地表面から 0.2m が表土で、その下に厚さ 0.1m の暗褐色 (10YR3/3) 砂質土が堆積する。近世の明確な遺構は判断できず、SD01 が標高 8.4 mにおいて検出されることから１面とした。その下は、黒褐色 (10YR3/2) 粘質土が約 0.4m の厚さで堆積する。その下で須恵器や土師器を含む遺構が検出されるので２面とした。２面は、黄橙色 (10YR8/8) 粘土の基盤層で、その上面の標高は、8.2 ～ 8.1m である。

ⅡB区（図 13）

ⅡB区は、現地表面から 0.2m が表土で、その下に厚さ 0.1m の暗褐色 (10YR3/3) 砂質土が堆積する。近世の明確な遺構は検出できず、ⅡA区で検出した SD01 の検出面の標高 8.4m を１面とした。その下は、黒褐色 (10YR3/2) 粘質土が約 0.4m の厚さで堆積する。その下で須恵器や土師器を含む遺構が検出されるので２面とした。２面は、黄橙色 (10YR8/8) 粘土の基盤層で、その上面の標高は、8.2 ～ 8.1m である。

（２）遺構の概要

本調査では、重機により現代の盛土や攪乱、第２次世界大戦までの整地層を除去して、調査対象の江戸時代の遺構より人力による精査を行った。遺構検出面は２面で、遺構は表２の通り。

表２　遺構概要表

調査区	検出面	時　代	遺　　構	備　　考
Ⅰ区	１面	江戸時代	SK01 ～ SK04	礎石・土間
	２面	古代 古墳時代 弥生時代	SD101、SB101 SK101、SK102 SI101、SI102	
ⅡA区	１面	中世	SD01	
	２面	古代 古墳時代 弥生時代	SD101、SD102、SK101、SK102 pit44、pit64 SI101、SI102、pit30、pit38	
ⅡB区	１面	近代～近世		該当遺構なし
	２面	古代 弥生時代	SD103 ～ SD105、SK103 ～ SK109 SI103 ～ SI107	

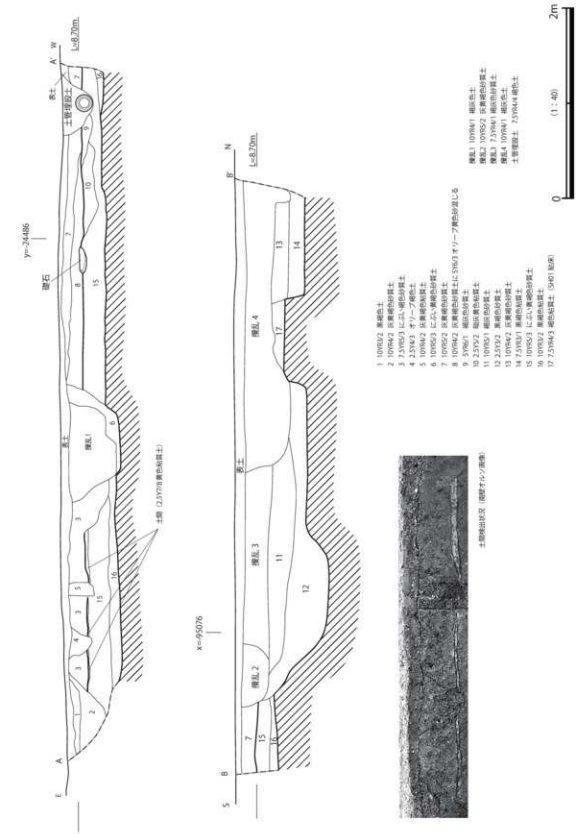
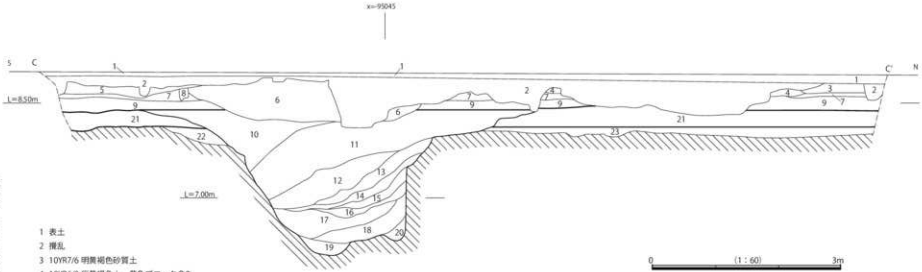


図 11　Ⅰ区南壁・西壁土層断面図（1：40）



1 表土
2 撹乱
3 10YR7/6 明黄褐色砂質土
4 10YR6/2 灰黄褐色土　黄色ブロック含む
5 10YR7/6 明黄褐色粘質土
6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
7 10YR5/2 暗褐色砂質土に 7.5YR3/2 黒褐色砂質ブロックをまばらに含む
8 10YR5/1 褐灰色砂質土　確混じり
9 10YR3/3 暗褐色砂質土に 7.5YR3/2 黒褐色砂質ブロックをまばらに含む
10 10YR3/3 暗褐色砂質土に 7.5YR3/2 黒褐色砂質ブロックをまばらに含む
11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土に 7.5YR3/2 黒褐色ブロック含む
12 10YR4/2 灰黄褐色砂質土　粘性強い
13 10YR8/6 明橙褐色砂質土に 7.5YR7/6 橙色ブロックまばらに含む
14 10YR6/2 灰黄褐色砂質土
15 10YR6/1 褐灰色砂質土
16 10YR6/6 明橙褐色砂質土に 7.5YR7/6 橙色ブロックまばらに含む
17 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
18 10YR3/2 黒褐色砂質土
19 10YR4/1 褐灰色砂質土 (SD01 埋土)
20 10YR7/2 にぶい黄橙色砂質土 (SD01 埋土)
21 10YR3/2 黒褐色粘質土
22 10YR3/2 黒褐色粘質土
23 7.5Y6/4 にぶい褐色粘質土

SD01 埋土
① (P22 本文中上層番号に対応)
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨

図 12　Ⅱ A 区西壁土層断面図 (1 ： 60)

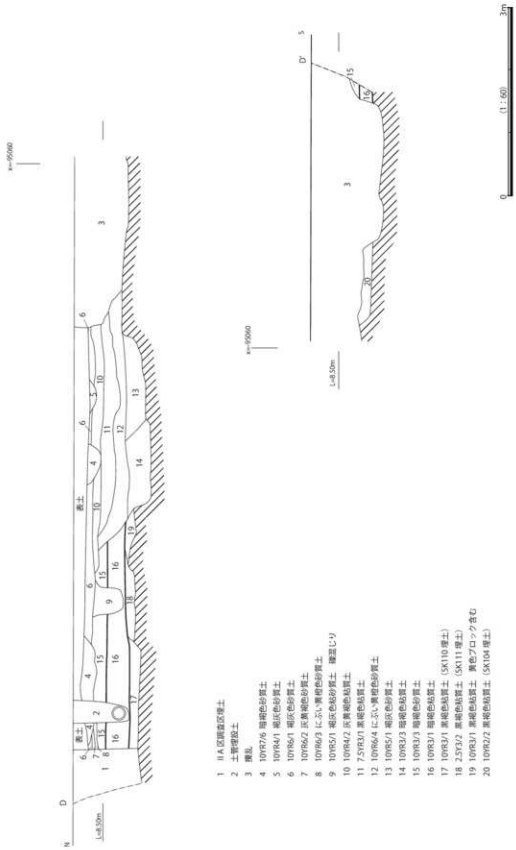


図13 ⅡB区東壁土層断面図(1：60)

（3）Ⅰ区の遺構

1面の遺構 (図 14・15、図版 1)

本調査区は佐屋街道に面しているため、佐屋街道が機能していた寛永 11 年（1634）から明治 5 年（1872）までの遺物が伴う遺構を対象とした。そのため同一面で見つかった土坑であってもここでは型紙摺絵（以下印判手とする）の磁器が出土した場合は攪乱扱いとした。ここでは 4 基の土坑を報告する。

S K 01 は、調査区西端で検出した。東西 0.5m 以上、南北 3.5m を測る。方形土坑で、深さ 0.74m。西側は調査区外へ広がる。埋土は、上から褐灰色 (10YR5/1) 砂質土、黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質土で、近世の陶磁器が出土している。下層の黒褐色砂質土からは木製品のほか、特筆すべき遺物としては荷札木簡（図 30-3・4）があげられる。

S K 02 は、調査区の北西寄りで検出した。東西 1.0m、南北 1.2m 以上の方形土坑である。深さ 0.49 mを測る。北側は攪乱によって切られている。埋土は、灰オリーブ (7.5Y6/2) 砂質土で、近世の陶磁器が出土している。

S K 03 は、調査区の北側の中央寄りで検出した。規模は東西 2.2m、南北 1.2m 以上の方形土坑である。北側は調査区外に広がる。深さ 0.44m を測り、埋土は 3 層からなる。上からオリーブ黄色 (5Y6/3) 砂質土、灰色 (5Y5/1) 粘砂質土、オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 粘質土で焼土を含む。上から 2 層目の灰色粘砂質土からは大量の建築部材や瓦が出土した。また各層からは近世の陶磁器が出土している。

S K 04 は、調査区北西隅で検出した。遺物の出土はなかったが、印判手の皿を含む攪乱によって切られているため、近世の土坑と判断した。東西 1.7m、南北 1.3m 以上の方形土坑と思われる。深さは 0.18m で、埋土は上から灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土、黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土であった。

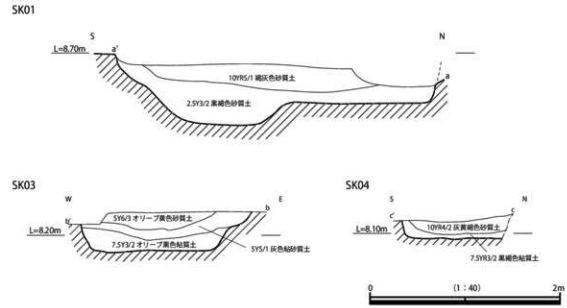


図 14　Ⅰ区 1 面遺構土層断面図（1：40）

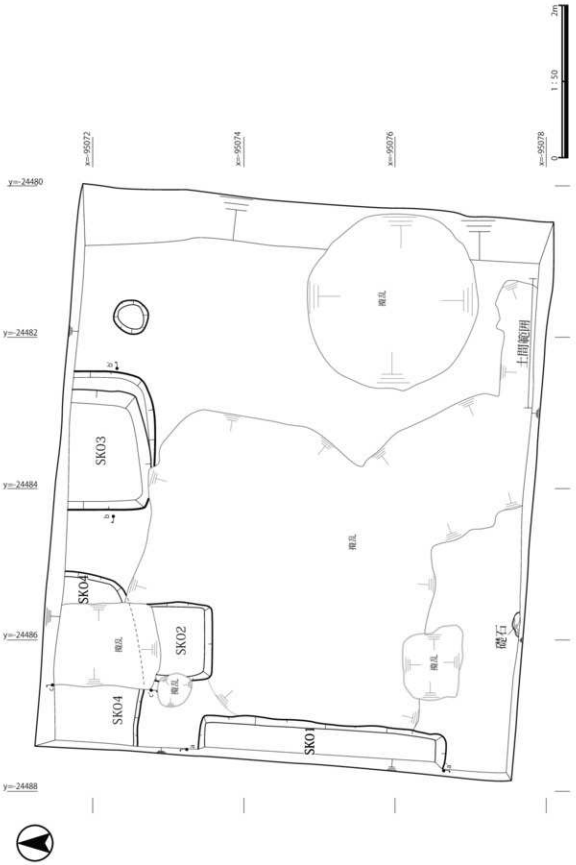


図 15　Ⅰ区 1 面遺構平面図（1：50）

２面の遺構（図 16・17、図版 2）

S K 101 は、調査区の北東にて検出した。長辺 2.8m、短辺 0.9m の東西方向に長い楕円形の土坑である。埋土は黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土で、深さ 0.21m である。遺物は土師器の小片が数点出土した。遺物から SI102 より新しい遺構と思われる。

S K 102 は、調査区の北東で検出した。東西 0.6m、南北 0.5m の隅丸方形を呈している。深さ 0.31m、埋土は暗褐色 (10YR3/3) 砂質土である。須恵器の甕や土師器の杯・高杯の破片が出土した。

S D 101 は、調査区南東で検出した幅 0.5m、深さ 0.17m の東西溝である。調査区の東側では攪乱により検出できなかった。溝の断面形状は「U」の字を呈しており、埋土は黒褐色 (10YR3/2) 砂質土である。遺物は出土していない。

S B 101 は、桁行２間（2.0 ～ 2.2m）×梁行２間（1.2m）で、東に東西 1.2m、南北２間（柱間 2.4m）の庇をもつ掘立柱建物である。規模は東西 3.7m、南北 4.7m である。南北は調査区の範囲外に広がる可能性もある。庇の柱穴 pit116 から土師器片が出土した。

S I 101 は、北側周溝と主柱穴の存在から方形竪穴建物と考えている。調査区の南東寄りで検出した。東西辺 1.5m を確認している。西は攪乱、東は近代の井戸により検出できなかった。南北は 2.5m で、南側は調査区外に広がる。確認した周溝の幅は 0.07m であった。床面までの深さは 0.05m で、埋土は黒褐色 (10YR3/2) 粘質土である。遺物は少ないが弥生土器が出土している。

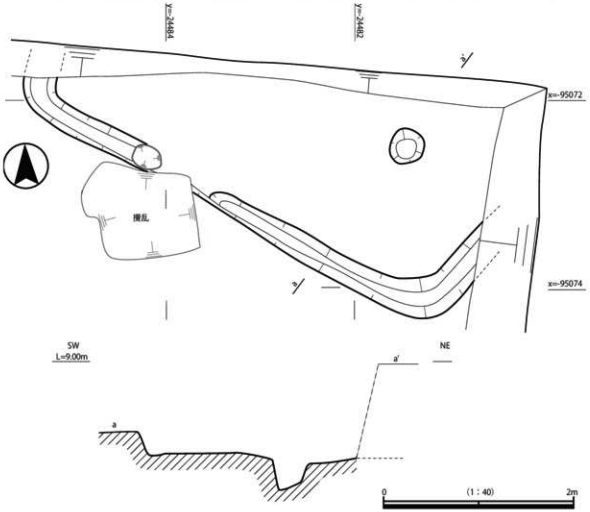


図 16　Ⅰ区２面 SI102 平面・断面図（1：40）

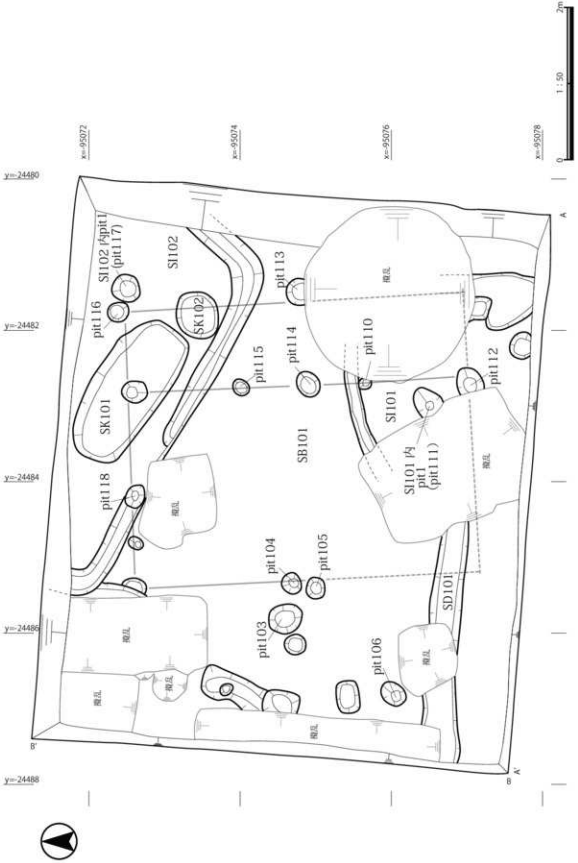


図 17　Ⅰ区２面遺構平面図（1：50）

ＳＩ102 は、調査区の北東寄りで検出した。遺構の北半は調査区の外に広がる。確認できた南辺は東西 5.2m で、方形竪穴建物と考えている。床面までの深さ 0.29m で、壁の周囲には幅約 0.34m の周溝をもつ。南北は、約２m まで調査区内で確認している。建物の主柱穴は南東にあたる１ヵ所のみ。他は、範囲外になる。建物の埋土は黒褐色 (10YR3/1) 粘質土で、土師器片のほか須恵器片が出土している。

（４）ⅡＡ区の遺構

１面の遺構 (図 18 ～ 20、図版 3)

ＳＤ01 は、ⅡＡ区の南寄りで検出した。調査区西壁で幅約 6.2m、深さ 2.1m の規模を呈する東西溝が確認できた。溝の東側は、大きな攪乱により上端が検出できなかったが、わずかに残る溝の底部が確認できたため、調査区外まで延伸していると考えられる。溝の断面は西壁では「U」の字状で、図 19 に提示したセクションでは溝の断面は「V」の字状であった。西壁（図 12）で確認した埋土は、上から、①暗褐色 (10YR3/3) 砂質土、②にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土、③灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土、④明橙褐色 (10YR8/6) 砂質土、⑤灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土、⑥褐灰色 (10YR6/1) 砂質土、⑦明橙褐色 (10YR 6 /6) 砂質土、⑧にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土、⑨黒褐色 (10YR3/2) 砂質土である。北から南に傾斜する土層が観察され、この傾斜をもつ土層にはブロック状土塊と古代から中世の遺物が認められた。

図 18　ⅡＡ区１面 SD01 東壁 (西から)

セクションで確認した溝の下部堆積は、西壁で確認された溝の堆積とは大きく異なる。

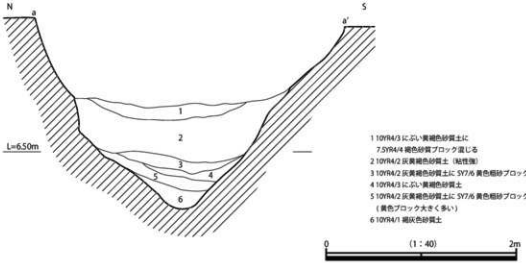


図 19 ⅡＡ区１面 SD01 土層断面図（1：40）

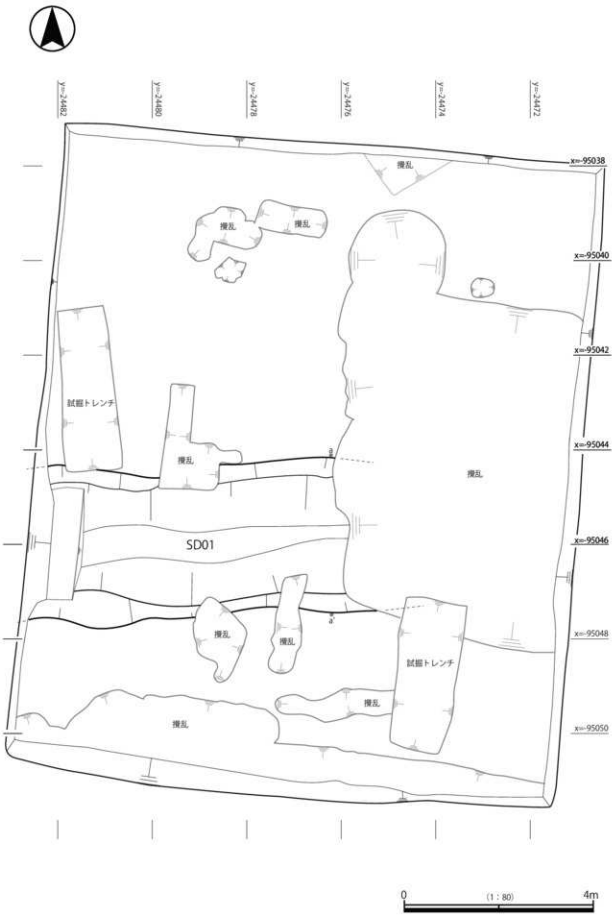


図 20 Ⅱ A 区 1 面 遺構平面図（1：80）

溝底の標高は、西壁で 6.319 m、セクションでは 5.89 mであった。溝の埋土からは古代瓦・土器、中世の陶器が出土している。

この溝は規模や断面形から城館に関する施設と思われる。城館の郭内、もしくは建物の位置は、溝を埋めた土砂の堆積から溝の北側に存在していたと推測される。

２面の遺構 (図 21 ～ 23、図版 4)

S D 101 は、調査区の南西角で検出した南北の溝である。規模は、幅 1.2m、深さ 0.17m を測る。断面が逆台形を呈している。埋土は、黒褐色 (7.5YR3/1) 砂質土に橙色砂質土ブロックが混じる。遺物は出土しなかった。

S D 102 は、調査区の南東で検出した南北の溝である。規模は、幅 0.64m、深さ 0.2m を測る。断面が逆台形を呈している。埋土は、灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土である。南はⅡ B 区に広がることが確認された。遺物は出土しなかった。

S K 101 は、調査区の中央付近で検出した。東側は攪乱に切られる。検出した規模は、東西 0.4m、南北 0.8m を測る方形の土坑である。深さ 0.16m で、埋土は黒褐色 (10YR3/1) 砂質土である。遺物は出土しなかった。

S K 102 は、調査区の南西で検出した。西側は調査区の外へ広がる。検出した規模は、直径 0.6m を測る隅丸の方形である。深さ 0.10m で、埋土は黒褐色 (10YR7/6) 砂質土（粘性強）である。遺物は出土しなかった。

S I 101 は、調査区の北西で検出した方形竪穴建物である。西側は調査区外に広がり、検出した東西辺は 5.5m を測る。南北は 4.7m を確認した。床面までの深さは約 0.11m である。埋土は、にぶい褐色 (7.5YR6/4) 粘質土である。土器の細片が出土している。

S I 102 は、調査区の南西寄りで検出した方形竪穴建物である。建物の北辺のみ確認できた。その規模は、東西辺 3.4m を測る。床面までの深さは約 0.1m である。南は SD01 で建物のほとんどが切られている。埋土はにぶい褐色 (7.5YR6/4) 粘質土である。土器の細片が出土している。

そのほかの遺構は、柱穴の pit30 と pit38 がある。

pit30 は、直径 0.32m、深さ 0.38m を測る。埋土は、上から黒褐色 (10YR3/2) 砂質土、暗褐色 (10YR3/3) 粘質土である。上層の黒褐色砂質土からは完形に近い高杯（図 35-44）が横位で出土した。

pit38 は、調査区の西側中央で検出した。直径 0.37m、深さ 0.21m を測る。埋土は、上から黒褐色 (10YR3/2) 砂質土、黒褐色 (10YR3/2) 粘質土である。上層の黒褐色砂質土からは、完形の小型壷 (図 35-45) が口縁部を下に向けた状態で出土した。

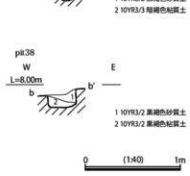


図 21 Ⅱ A 区 2 面 pit30・38 断面図
（1：40）

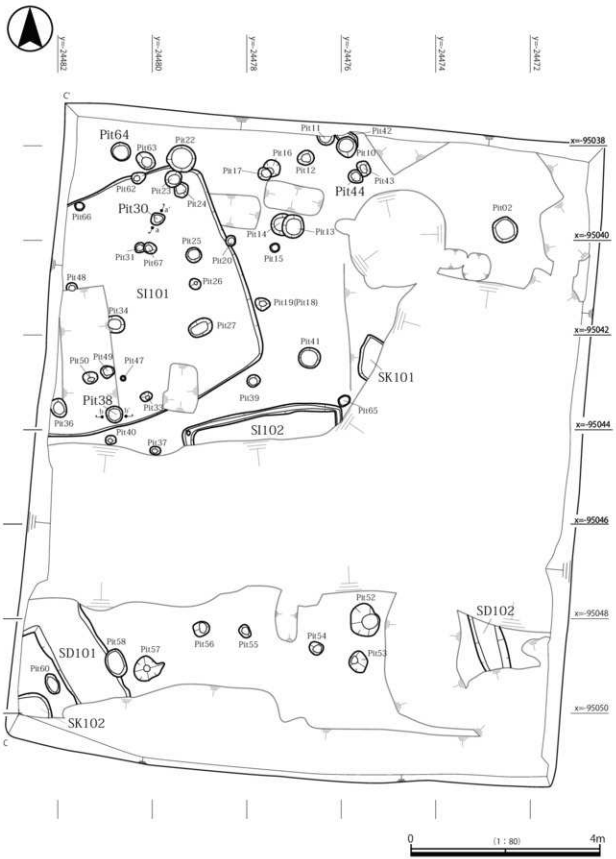


図 22 Ⅱ A 区 2 面遺構平面図（1：80）

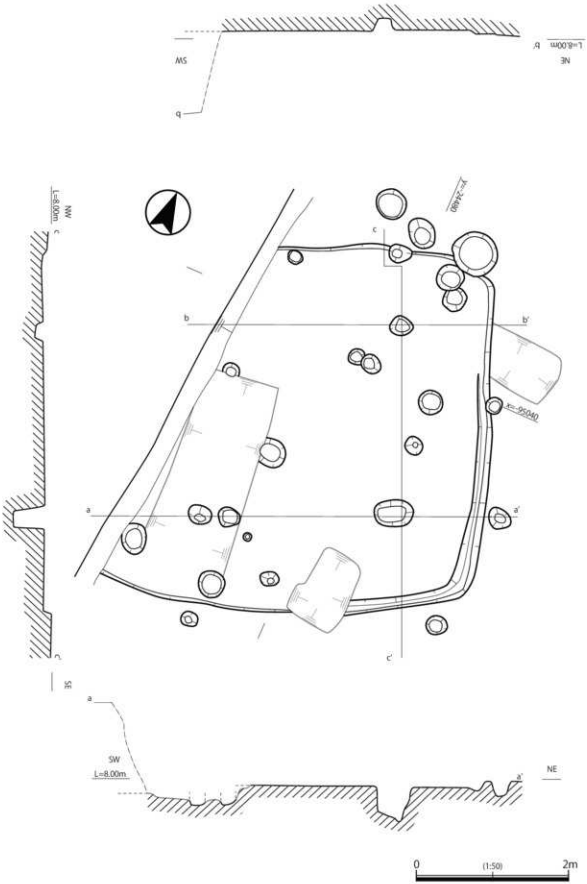


図23　ⅡA区２面 SI101 平面・断面図（1：50）

（5）ⅡＢ区の遺構 (図 24 ～ 28、図版 5)

ⅡＢ区１面では、近代以降の掘り込みを多数検出している。近世の遺構は確認できなかった。１面から２面に掘下げた際に、古代の土師器の杯や須恵器の杯・低脚高杯が出土した（図 36)。

２面の遺構

ＳＤ 102 は、調査区の北東で検出された。ⅡＡ区のＳＤ 102 から続く南北方向の溝である。幅 0.64m、深さ 0.14m を測る。埋土は、灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土である。遺物は出土していない。

ＳＤ 103 は、調査区の中央で検出された東西方向の溝である。東側・西側ともに攪乱で切られている。溝の断面は、逆蒲鉾形を呈している（図 24)。幅が 1.0m ～ 1.2 m で、深さ 0.41m を測る。埋土は、上から灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土、灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土、灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土の３層である。遺物は底面に糸切り痕のある須恵器の杯身（図 36-48）や軒丸瓦のＶａ型式（図 44-111）が出土している。

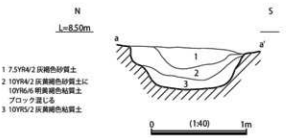


図 24 ⅡＢ区２面 SD103 断面図 (1:40)

ＳＤ 104 は、調査区の北西で検出された南北方向の溝である。南側は攪乱で切られている。確認した長さは 0.6m、幅は 0.2m で、深さ 0.16m を測る。埋土は、褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土である。土器の細片が出土している。

ＳＫ 103 は、調査区中央西寄りで検出したやや北に振る東西方向の溝状の土坑である。幅約 1.0m で、西側が攪乱で切られている。断面は、浅い台形状を呈し、深さ 0.33m を測る。埋土は黒褐色 (10YR3/1) 粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ 104 は、調査区の南東で検出した隅丸方形の土坑である。北西の角を検出したのみで南側は攪乱に切られ、東側は調査区の外へと広がる。検出した規模は、東西 1.0m、南北 1.2m を測る。深さは 0.15m と浅く底面は平坦であった。埋土は、黒褐色 (10YR2/2) 粘質土の単層である。遺物は出土していない。

ＳＫ 105 は、調査区中央西寄りで検出した。東西 0.6m、南北 0.8m の規模をもち、平面形が楕円形を呈する土坑である。その深さは 0.2m であった。埋土は、黒褐色 (10YR3/2) 粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ 106 は、調査区南西で検出した。東西 0.6m、南北 0.8m を測る楕円状の平面形を呈する土坑である。その深さは 0.2m であった。埋土は、黒褐色 (10YR3/1) 粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ 107 は、調査区中央南寄りで検出した。東西 0.4m 以上、南北 0.9m を測る、平面形が楕円状を呈すると考えられる土坑である。西北側が攪乱で切られている。土坑の深さは 0.07m と浅い。埋土は、黒褐色 (10YR3/1) 粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ 108 は、調査区の中央南寄りで検出した。東西 1.0m、南北 0.4m を測る楕円形の土坑である。

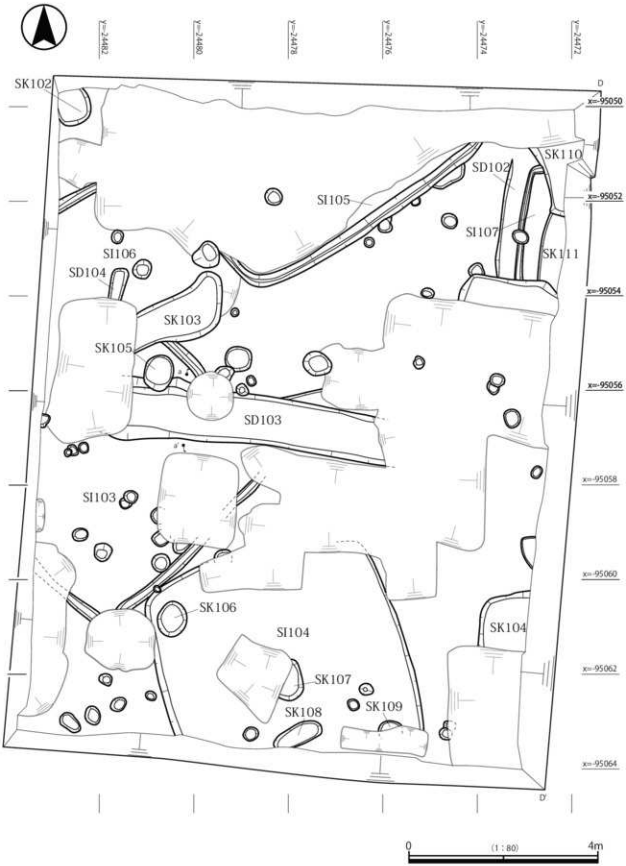


図25　ⅡB区２面遺構平面図（1：80）

南西の隅が調査範囲外に広がる。深さは、0.65m を測る。埋土は、黒色 (7.5YR3/1) 粘質土である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ 109 は、調査区の中央南寄りで検出した。直径 0.5m の円形と考えられる土坑である。南側が攪乱で切られている。深さは 0.28m を測る。埋土は暗褐色 (10YR3/3) 粘土である。遺物は出土はしなかった。

ＳＫ 110 は、調査区の北東隅で検出した。北側と東側は調査区外へ広がる。東西 1.1m、南北 1.5m で、深さ 0.19m を測る。平面形は方形の土坑である。埋土は、黒褐色 (10YR3/1) 粘質土である。遺物は出土していない。調査区の東壁土層断面（図 13）での切り合い関係から、SK111 は SK110 より古いと判断できる。

ＳＫ 111 は、調査区の北東隅で検出した。東側は、調査区の外へ広がる。東西 0.5m、南北 1.5m で、深さ 0.12m を測る。埋土は、黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土である。遺物は出土しなかった。

ＳＩ 103 は、調査区の中央西寄りで検出した。方形竪穴建物である。東西辺 5.5m、西北側は調査区外に広がる。南北 4 m 以上を確認した。埋土は、明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土である。確認した周溝の幅は 0.07m であった。床面までの深さは 0.05m である。遺物は少ないが弥生土器の台付甕が出土している。

ＳＩ 104 は、調査区の南端で検出した。検出した東西規模は 5.3m を測る。南北については、南側の壁が調査区外に広がる。検出した南北長は 4.3m 以上の規模を持もつ方形竪穴建物である。周溝は確認できなかった。床面までの深さは 0.05m で、埋土は、明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土である。弥生土器が多く出土している。

ＳＩ 105 は、調査区の北端で検出した。北側はⅡＡ区に広がるが、攪乱により確認できなかった。南西角を確認しているので、方形竪穴建物と考えられる。東西辺 5.5m 以上で、南北は 0.6m までは確認できるが、建物の北側は攪乱により不明である。確認した周溝の幅は 0.07m であった。床面までの深さは 0.05m で、埋土は黒褐色 (10YR3/2) 粘質土である。遺物はまったく出土しなかった。

ＳＩ 106 は、調査区の北西隅で検出した。周溝の検出により方形竪穴建物と考えられる。確認した周溝を北端に捉え東西 2 m 以上、南北 1.4m 以上と考えられる。確認した周溝の幅は 0.07m であった。床面までの深さは 0.05m で、埋土は黒褐色 (10YR3/2) 粘質土である。遺物は少ないが土器片が出土している。

ＳＩ 107 は、調査区の北東隅で検出した竪穴建物である。この建物は、西壁を SD102 に切られ、東は SK110 と SK111 に切られていることが、調査区東壁土層断面（図 13）からわかる。なお建物は調査区外に広がると思われる。周溝の検出により方形竪穴建物と考えられる。建物の北西角を確認した。東西辺 1.0m 以上、南北は 2.3m 以上を測る。確認した周溝の幅は 0.07m であった。床面までの深さは 0.05m で非常に浅い。埋土は、黒褐色 (10YR3/2) 粘質土である。遺物は出土していない。

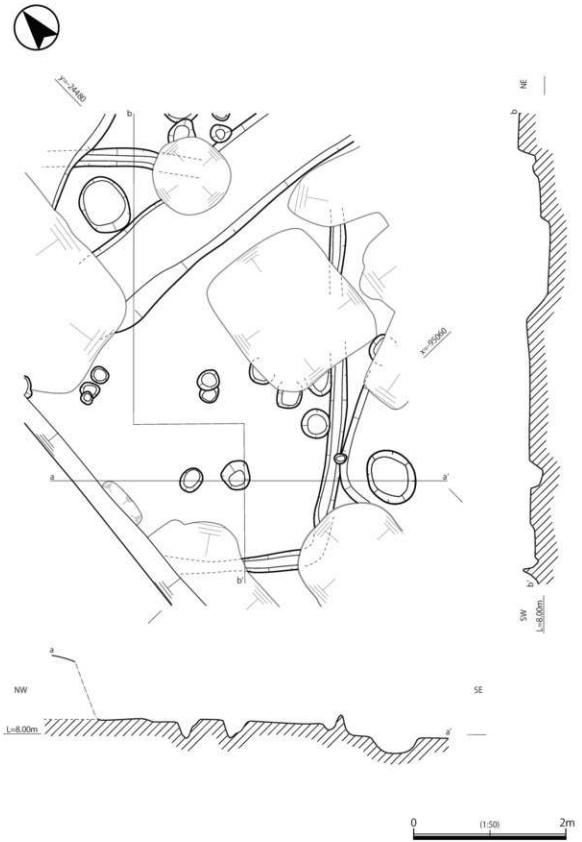


図 26　Ⅱ B 区 2 面 SI103 平面・断面図（1：50）

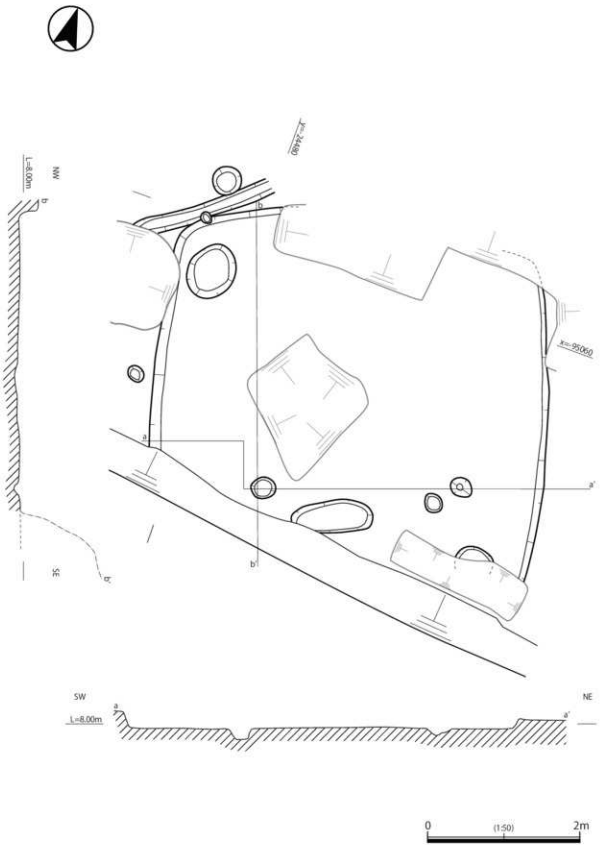


図 27　Ⅱ B 区 2 面 SI104 平面・断面図（1：50）

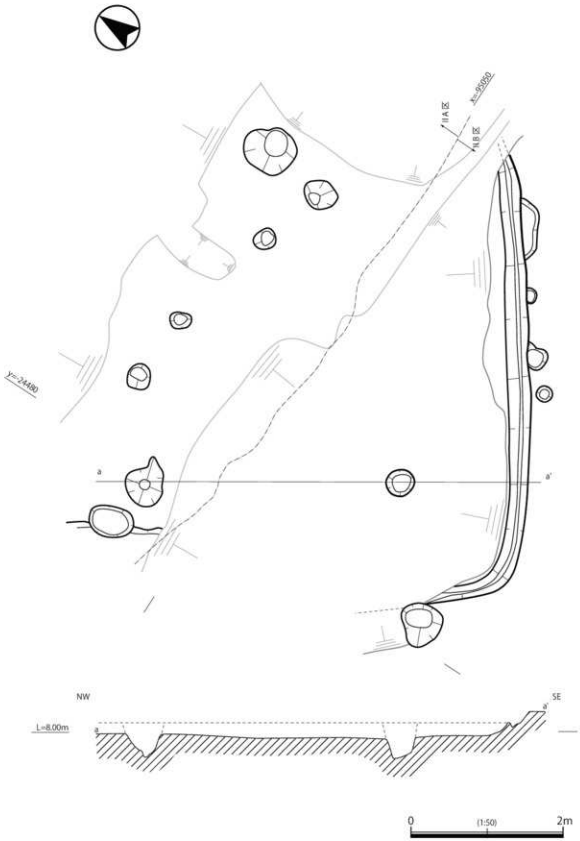


図 28　Ⅱ B 区 2 面 SI105 平面・断面図（1：50）

第４章　主な遺物

（１）遺物の概要

幕末から弥生時代に至る遺物が整理箱に 23 箱出土した。図化した遺物は 114 点である。このうち 24 点は瓦である。各調査区、遺構別の図化内容は表３に、遺物観察表は表４に提示した。

表3　遺物概要表

調査区	検出面	時代	遺構	遺物	報告書番号
IK	1面	近世	SK01	陶磁器、木製	図 30（1～4）
			SK02	陶磁器	図 30（5～11）
			SK03	陶磁器、瓦	図 30（12～14）
	2面	古代	SB101	土師器	図 31
		古墳	SK102	土師器、須恵器	図 32（29～33）
			SI102	土師器、須恵器	図 32（17～28）
		弥生	SI101	弥生土器	図 32（15・16）
IIAK	1面	近世～中世	包含層	銭貨	図 33（1～5）
			SD01	陶磁器、瓦、鉄滓	図 34（34～42）、図 39（91～98）、図 40（99～103）、図 41（104～107）、図 42（108・109）、図 43（110・112・114）
	2面	古墳	pit44	須恵器	図 35（46）
			pit64	須恵器	図 35（43）
		弥生	pit30	弥生土器	図 35（44）
			pit38	弥生土器	図 35（45）
IIBK	2面	古代～古墳	包含層	土師器、須恵器、瓦	図 36（47・49・50・52・53）、図 43（113）
		古墳	SD103	須恵器、瓦	図 36（48）、図 43（111）
		－	攪乱	須恵器	図 36（51）
		弥生	SI103	弥生土器	図 37（54～59）
			SI104	弥生土器	図 38（60～90）

整理にあたっては、佐藤公保 1990「5. 近世の陶磁器・土器」『名古屋城三の丸遺跡（Ⅰ）』㈶愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎 1990「1　廻間式土器」『廻間遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎 2005「時期区分」『愛知県史資料編３考古３古墳』愛知県史編さん委員会を参考にした。

以下、調査区ごとに分け、記述は遺構面の検出順に進める。

（２）Ⅰ区の遺物 (図 29 ～ 32)

１面の遺物

ＳＫ 01(図 30)

１は、磁器の端反椀で、口径 8.6㎝、器高 4.8㎝を測る。内外面に霊芝文様を描く。２は、輪禿皿である。内面に鉄絵が見られる。口径 13.1㎝、器高 3.4㎝を測る。３と４は、荷札木簡である。３は、長さ 15.1㎝、幅 2.7㎝、厚み 0.4㎝を測り、a 面には「御代官一色庄左衛門」、b 面には「稲狐（いなこ）新田○新三郎」と墨書されている。４は、長さ 16.8㎝、幅 3.1㎝、厚み 0.4 ～ 0.6㎝を測る。一部欠損。a 面には「御代官川水清 (兵衛)」、b 面には「納四○○…」と墨書されている。

ＳＫ 02(図 30)

５は、瀬戸・美濃窯製品の磁器箱形湯呑である。口径 7.4㎝、器高 5.3㎝を測る。外面に菊花、見込みには梅花文が描かれる。６は、肥前系の磁器丸椀で、口径 11.4㎝、器高 6.1㎝を測る。外面に草花文、見込みに五弁花文が描かれる。７も、肥前系の磁器丸椀で、いわゆる「くらわんか椀」である。外面には雨降り文が描かれた大きな丸文と塗りつぶされた小さな丸文がある。口径 11.8㎝、器高 6.4㎝を測る。この椀には焼継が認められた。焼継は、江戸時代後期から明治時代の中頃

まで続く茶碗類の修理方法である。文献史料によると、寛政年間 (1789 ～ 1801) 頃に京都で始まったとある[1]。8は、美濃・瀬戸窯製品の磁器広東椀である。口径 11.6㎝、器高 6.3㎝を測る。焼継が施されている。9は、陶胎で瀬戸・美濃窯製品の広東椀である。口径 11.0㎝、器高 5.7㎝を測る。外面に宝珠文、見込みには五弁花文を描く。10は、陶器の碗で、産地は不明である。底部は欠損するが、外面に呉須による草文が認められる。口径は 10.6㎝で、器高は 6.3㎝を測る。11は、美濃・瀬戸窯製品の擂鉢である。口径 34.3㎝、器高 12.8㎝を測る。底面に糸切痕が確認でき、底径が 16.3㎝であった。

陶磁器以外に石製の長方硯が2点出土している（図 29）[2]。1は、陸側が欠損するが、横 8.2㎝、残存長 9.1㎝の大きさである。現状では厚さ 1.1㎝を計測する。2は、硯縁の一部が剥離するが、平面は長方形を呈する。長さ 12.3㎝、幅 6.1㎝で、厚みは 1.4㎝を測る。硯面の四方は隅丸を呈し、直に立ち上がる縁をもつ。底は平らである。1の硯同様硯面には使用痕跡と墨が残存していた。

図 29 Ⅰ区 1 面 SK02 出土の石硯

S K 03(図 30)

12は、瀬戸・美濃窯製品の広東椀である。外側に蝙蝠と「寿」の文様を描く。見込みには「寿」の文字が認められる。口径 10.8㎝、器高 6.0㎝を測る。13は、瀬戸・美濃窯製品の染付皿である。内面には扇と草文が描かれ、見込みには五弁花文が呉須で描かれる。陶胎染付である。口径 12.8㎝、器高 3.1㎝を測る。14は、軒桟瓦で、桟部と平部は欠損する。小丸瓦当と平部瓦当の接合は、平部瓦当の端面を角切りする。また平部瓦当右外縁の角切は、上角から下角に向かって切り落としている[3]。小丸瓦当は、左巻の三つ巴文で、その周りに 12 個の珠文を配する。平部瓦当は、樹枝が3本でその上に7個の珠文を配する。中心飾りの左右には唐草が2反転する。この構成からなる軒桟瓦を「東海式」と呼称している[4]。同様の東海式唐草文は、名古屋城三の丸遺跡第4・5次調査で出土している[5]。報告書では、軒桟瓦Ⅷ (天明年間 1781 ～ 1789) とし、近世Ⅷ期 (1765 ～ 1800) に属する。

註

[1] 堀内寛昭 1999「焼継」『リーフレット京都№ 128』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

[2] 水野和雄 1985「日本石硯考 － 出土品を中心として － 」『考古学雑誌』第 70 巻第 4 号

[3] 桟瓦ついては、杉本宏 2000「桟瓦考」『考古学研究』第 46 巻第 4 号を参考とした。

[4] 桟瓦の平部文様は「江戸式」、「大坂式」、「東海式」の三種類に分類されている。
福井知樹 2019「大坂瓦の一研究『紀要第 32 号』公益財団法人滋賀県文化財保護協会

[5] 水野裕之・服部哲也ほか 1994『名古屋城三の丸遺跡第 4・5 次発掘調査報告書　遺物編』名古屋市教育委員会

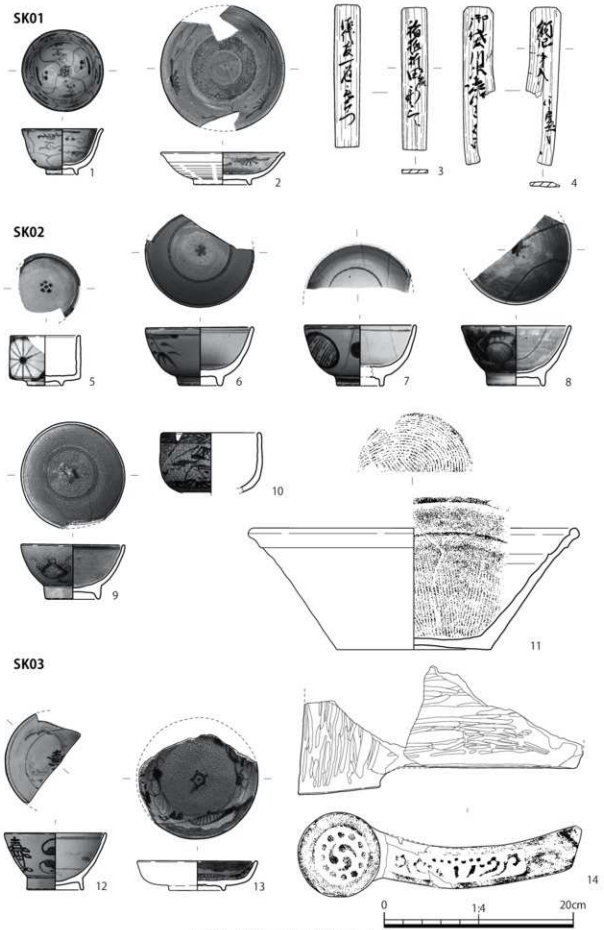


図 30 Ⅰ区 1 面出土遺物 (1 ： 4)

２面の遺物

ＳＢ 101(図 31)

柱穴 (pit116) から出土した土師器の椀である。高台径は復原することができなかった為、図化していない。高台の断面は三角形を呈する。

図31　Ｉ区２面 SB101
pit116 出土土師器

ＳＫ 102(図 32)

29 は、土師器の杯で、底部が欠損する。外面はヨコナデし、口縁部端部は、外方へつまみ出し、端面を丸く仕上げる。口径 13.8㎝、残存高 3.8㎝を測る。色調は、にぶい褐色を呈する。30 は、土師器の杯である。口縁部端部が外反し、端面を丸く仕上げる。調整は不明である。口径が 14.8㎝を測る。色調は、橙色を呈する。31 は、土師器の高杯の杯部分である。口縁部付近が残存し、口径 20.6㎝を測る。外面はハケ調整で端部にヨコナデを施し、丸くおさめる。32 は、須恵器の杯底部である。色調は、灰色を呈する。33 は、須恵器の甕体部である。外面は平行タタキで平行する沈線が３条観察できた。色調は、灰白色を呈する。

ＳＩ 101(図 32)

15 は、高杯の脚部で、杯部分は欠損する。脚の上位で円形スカシ孔が２孔確認できる。内外面の調整は、不明である。色調は、浅黄橙色を呈する。16 は、SI101 の柱穴である pit111 から出土したく字状口縁甕である。口径が 16.8㎝を測る。外面はハケ調整を施している。外面にはススの付着が観察された。

ＳＩ 102(図 32)

17 は、土師器の杯である。底は面を持つが全体的に丸みを持つ。口径 13.2㎝、器高が 4.0㎝。内面にヘラミガキを施す。色調は、橙色を呈する。18 と 19 は、土師器の高杯である。口縁部のみが残存する。いずれも口径 21.0㎝を測る。調整は 18 が内外面にナデ調整を施すのに対し、19 は内外面にハケメが観察できる。色調は、18 がにぶい橙色で、19 はにぶい黄褐色である。20 と 21 は、土師器の高杯脚部である。杯部は欠損する。脚部が裾に向かって緩やかに広がる形態である。裾の直径は、20 が 8.8㎝で、21 が 8.4㎝を測る。外面はいずれもナデ調整であるが、21 の内面はヘラケズリが観察できた。22 は、台付甕の脚部である。残存高は、3.9㎝を測る。外面はハケメ調整が観察できた。23 は、SI102 の柱穴である pit117 から出土したく字状口縁甕の口縁部である。SI102 の埋土から出土した体部２片が接合した。復元できた口径は 11.3㎝である。外面調整は、磨滅が著しく不明であるが、ハケメの可能性がある。内面は横位のヘラケズリを施す。体部下半が欠損し、残存する器高は 11.3㎝を測る。24 は、須恵器の杯蓋片である。３㎝四方の小片である。回転ヘラズリの存在から天井部と判断した。色調は、灰白色を呈する。25 ～ 28 は、須恵器甕である。曲線から 25 は肩部あたり、それ以外は体部片と考えている。外面は、平行タタキを施す。内面は横方向のナデが観察できる。27 は、須恵器甕片であるが、平らな面をもつので底部付近の破片と考えている。外面には平行タタキを施している。

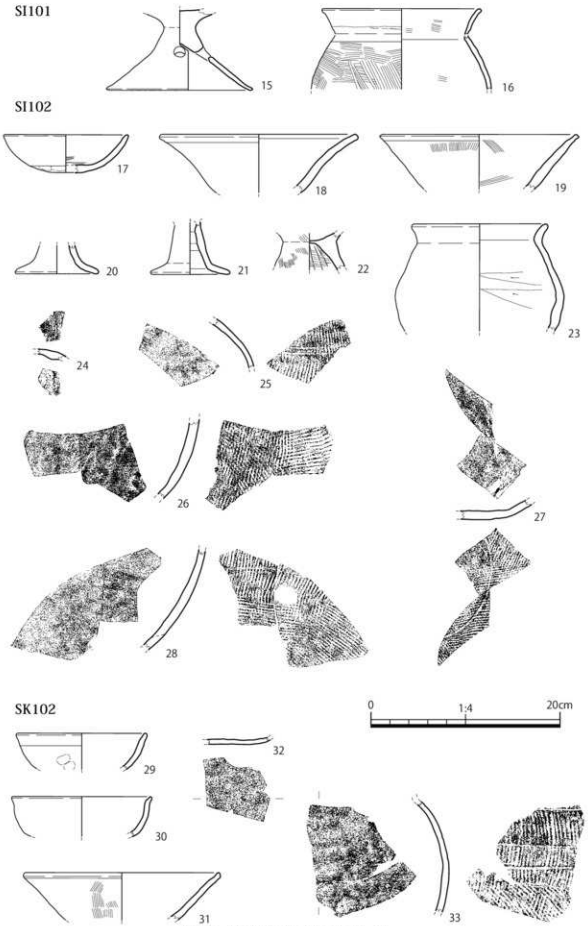


図32　Ⅰ区２面出土遺物（１：４）

（3）ⅡA区の遺物（図33～35）

1面の遺物

図33は、銭貨である。1～3は、1面を覆う暗褐色砂質土（包含層とした）から出土した。4・5は、ⅡA区の排出した土から採集した。全部で5枚あり、錆が著しく銭種が不明な4以外は、寛永通宝である。また、寛永通宝とした1～3・5についても、古寛永（1636~1659）か新寛永（1668~幕末）かは判断できなかった。裏面については、文字は確認できなかった。大きさは、1の直径が2.6㎝、他は直径が2.3㎝であった。

図33　ⅡA区包含層・排土の銭貨

SD01（図34）

34は、灰釉の輪禿皿である。口径10.1㎝、器高2.75㎝を測る。内面は輪状に釉をカキトリしている。35は、志野の丸皿である。口径10.2㎝で、器高は2.7㎝を測る。色調は灰白色を呈する。36は、瀬戸・美濃窯製品の天目茶碗で、底部を欠損する。口径11.4㎝で、残存高は5.0㎝を測る。暗褐色系の釉薬をかける。37は、天目茶碗の底部で、貼付による高台である。高台の高さが1.0㎝で、底径4.3㎝を測る。38は、瀬戸・美濃窯製品の鉄絵皿で、底部のみ遺存する。底径が6.4㎝の削り出し高台をもつ。39は、志野丸皿。底部のみ残存する。底径は6.4㎝を測る。内外面を施釉し、3ヵ所のトチン痕が残る。色調は、灰黄色を呈する。40は、瀬戸・美濃窯製品の鉢である。口縁部が欠損する。残存高は、8.7㎝を測る。碁笥底で、見込みにトチン痕、また底部にもトチン痕が観察される。外面に鉄釉による「輪違文」の絵付けがある。41は、鉄絵鉢である。美濃の笠原で多く作られた、いわゆる「笠原鉢」である。体部下半が欠損する。残存高は、4.9㎝で、復元口径は30.6㎝を測る。内面に鉄絵付けが観察できる。42も笠原鉢の鉄絵鉢である。小片の為、口径を復元することができなかった。内面に鉄釉による絵付けが認められた。

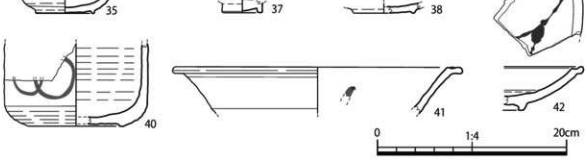


図34 ⅡA区 1面SD01出土遺物（1：4）

２面の遺物

pit44(図 35)

46 の須恵器の無蓋高杯が出土した。杯部の底部から脚部が欠損する。口径 12.8㎝で、残存する高さが 5.3㎝を測る。口縁部は外反気味で内面に段を有する。体部には 1 条の稜がめぐり、文様は施されていない。色調は、灰色を呈する。東山 11 号窯式と考えられる。

pit64(図 35)

43 の須恵器の杯身が出土した。口径 8.4㎝、器高 4.1㎝を測る。完形である。底面付近に回転ヘラケズリが観察される。底部が平坦である。色調は、灰色を呈する。

pit30(図 35)

44 の弥生土器の椀形高杯が出土した。器高は 8.9㎝を測る。半球状の杯部を呈する。口縁部の口径は 10.3㎝で、杯の内外面にミガキが施される。脚裾径は、13.8㎝で脚部外面はミガキが観察できる。脚部には 3 ヵ所のスカシ孔が認められる。

pit38(図 35)

45 のミニュチュアの壷が出土した。口径 3.2㎝、器高 4.2㎝を測る。成形は、手づくねによる。4 ㎝程度の粘土塊を指先に刺して内面を作り、外面を指で整形する。口縁端部は、直に立上る。底部は面を持つ。色調は、浅黄橙色を呈する。

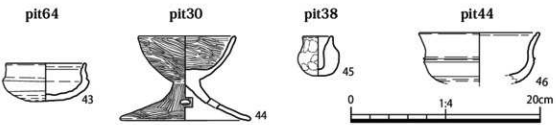


図 35 Ⅱ A 区２面 出土遺物 (1 ： 4)

（4）Ⅱ B 区の遺物 (図 36 ～ 38)

47 は、土師器の皿である。口径 14.0㎝、器高 3.0㎝を測る。内外面をロクロナデ調整し、ミガキは見られない。底面はヘラケズリを施すか。胎土は緻密で、色調は、にぶい橙色を呈する。49 は、須恵器の杯身で、口径 15.2㎝、器高 4.0㎝を測る。底部には「ハ」の字状に広がる高台が付く。高台径が 11.4㎝である。色調は、灰黄褐色を呈する。50 は、須恵器の高杯である。杯部口縁と脚部裾は欠損している。色調は、灰色を呈する。51 は、須恵器の高杯である。口径 11.4㎝、器高 6.3㎝を測る。口縁部は直立気味で、端面は丸く仕上げる。脚部は欠損する。脚部の剥離面から、6 ヵ所のスカシ孔の存在が復元できる。攪乱からの出土である。東山 111 号窯式と考えられる。52 は、須恵器の甕口縁部の破片である。外面に刺突文が施される。色調は、灰白色を呈する。53 は、須恵器の鉢である。口縁部が遺存する。小片のため口径の復元はできなかった。外面は平行タタキを施す。端面はヨコナデを施し、直角に折れる端面をもつ。色調は、灰色を呈する。

２面の遺物

ＳＤ 103（図 36）

48 の須恵器の杯身が出土している。底面に糸切痕が観察される。口径 12.8㎝、器高 3.6㎝を測る。色調は、黄灰色を呈する。

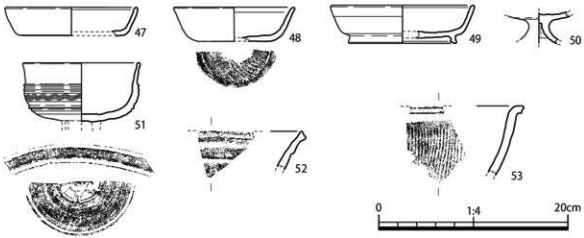


図 36 ⅡＢ区２面 出土遺物 (１ ： 4)

ＳＩ 103（図 37）

54 は、甕の口縁部である。復元できた口径は 14.8㎝である。口縁端部から外面にかけてナデ調整を施すが、内面はハケ調整である。55 は、受口系甕の口縁部である。小片のため口径は復元できなかった。56 は、く字状口縁甕の口縁部である。口径は 16.0㎝を測る。外面肩部にハケメが観察できた。57 は、台付甕の脚部である。底径 9.0cm で、脚台部の高さは 4.7㎝を測る。58 は、台付甕の脚台部である。59 は、台付甕の脚台部である。外面にハケを施す。

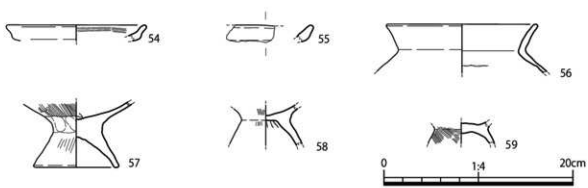


図 37 ⅡＢ区２面 SI103 出土遺物 (１ ： 4)

ＳＩ 104（図 38）

60 は、高杯で、杯部口縁端部と脚裾部が欠損する。61 は、高杯脚部で、杯部と脚裾部が欠損する。「ハ」の字状に広がる。62 は、高杯の脚部で、杯部と脚裾部が欠損する。脚部は中実である。63 は、杯部が椀形を呈する高杯である。口縁端部と脚裾部が欠損する。64 は、脚裾部径が 12.8㎝を測る。残存する高さが 4.2㎝でその間に円形のスカシ孔が２段に４ヵ所復元できる。65 は、器台で、口

縁部と脚裾を欠損する。脚部に円形のスカシ孔が見られる。66 は、器台で脚裾部を欠損する。口径 9.7㎝を測る。脚部裾は欠損するが、口径より脚部の直径が凌駕するタイプである。内外面にヘラミガキを施す。67 は、杯部に段もつ有段高杯である。小片のため口径を復元することはできなかった。68 は、蓋である。椀を伏せた形状を呈し、口径 12.4㎝、器高 5.7㎝を測る。つまみ部分はナデ調整を施し、上面をヘラで削って凹ませている。蓋の内外面はミガキを施している。69 の壷口縁は、口径 10.6㎝、高さ 4.0㎝を測る。内外面はナデ調整による。口縁端部には指オサエの痕跡が見られる。70 は、大型の台である。台裾部の直径は、23.2㎝で、台の上部が剥離しており、高さ 4.5㎝を測る。内外面はミガキによる調整で、裾端面をヨコナデして面を作る。円形のスカシ孔が 3 ヵ所確認できる。71 の壷口縁は端面が垂下・拡張口縁を呈し、内面に加飾をする。口径 16㎝を測る。72 ～ 74 は、有段の口縁をもつ壷と考えられる。内外面にはハケメ調整を施す。75 ～ 77 は、S 字状口縁甕の口縁である。口径は、75 が 17.5㎝、76 が 20.8㎝、77 が 16.2㎝であった。このうち最も残りが良い 77 は、肩から体部中央までハケメ調整を施し、内面は工具によるナデが観察された。また、外面にはススが付着していた。78 は、く字状口縁甕である。口縁部と肩部付近が残存する。口径は 21.2㎝で、残存高は 16.9㎝である。口縁端面を丸く収めている。体部は粗いハケメが観察できる。79 は、甕の口縁部で、体部は欠損する。口径 24.6㎝で、残存高は 6.3㎝である。く字状の頸部をもち、口縁部外面はハケメ調整のあとにナデ消しを行っている。内面は、工具によるナデが観察された。体部内面は横方向のヘラケズリを施していた。外面はススが付着している。80 は、く字状口縁甕である。体部下半から底部を欠損する。口径は 21.2㎝で、残存高は 16.9㎝である。口縁端面を丸く収めている。体部中央部分にヘラケズリが観察できる。下半部は粗いハケメを施す。81 ～ 84 は、壷の底部である。81 の底径は 7.1cm を測る。単位は不明であるが、ヘラミガキが観察できる。85 ～ 90 は、台付甕の台部である。90 の外面は、ハケメ調整を施す。底径は 9.2㎝、高さ 4.4㎝を測る。

参考文献

永井宏幸・村木誠 2002「尾張地域」『弥生土器の様式と編年 － 東海編 － 』木耳社

赤塚次郎 2003「東海地域としての土器様式」『古墳出現期の土師器と実年代 (シンポジウム資料編集)』㈶大阪府文化財センター

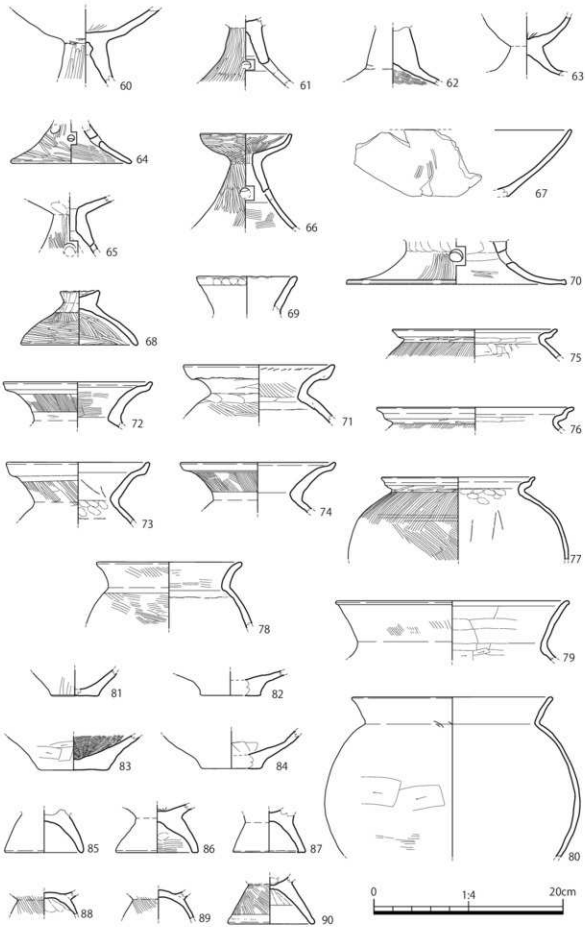


図38 ⅡB区2面SI104出土遺物(1：4)

(5) 出土瓦

今回の調査で、ⅡA区1面のSD01から整理箱5箱の瓦が出土した。総遺物箱数の約20%である。出土した瓦はほとんどが細片で、二つの隅が残る瓦もない。第19次出土瓦の分析に当たり、平瓦・丸瓦については、SD01の灰黄褐色砂質土層から出土した資料のみ使用した。出土瓦全体の4分の1は、丸瓦であった。軒瓦については、5点であった。このうちⅡA区1面のSD01からは、110、112の軒丸瓦が、114の軒平瓦が出土した。SD01以外で、ⅡB区2面のSD103から111の軒丸瓦が、ⅡB区包含層から113の軒平瓦が出土した。鴟尾と考えられる破片も確認できたが、すべてⅡA区1面のSD01からの出土であった。

平瓦(図39・図40)

平瓦の成形は、桶巻作りと一枚作りが存在する。桶巻作りと考えられる93は、幅3㎝の桶の枠板痕が確認できた。細片のため、桶の復元は不可能であった。綴痕は認められない。一枚作りについては、過去の調査でその可能性があるものは、凸面縄タタキに限られるようである。また、一枚作りでは、過去に確認されている成形台については、布をひいた凸面台で成形し、後に離れ砂をひいた凹面台に乗せて調整の製作手順が推定されている。凹面・凸面2種類の成形台であるが今回は判断できなかった。

凸面の調整は、刻線の叩き板と縄巻の叩き板に大別できる。さらに、刻線の叩き板は、91・92の平行タタキ、93・94の斜格子タタキ、95の正格子タタキに細分できる。斜格子タタキは、さらに格子の大きさで細分が可能である。次に、縄巻の叩き板について見てみよう。96は、縄巻の叩き板による凸面の調整による。平成3年に名古屋市教育委員会が実施した第5次調査では、縄巻の叩き板は、側縁と平行に叩くものと、弧状に叩くものに分けられ、前者の多くは縄目を潰して離れ砂が付着すると報告されている。今回の観察では、破片が多く確定にはいたらなかった。100と101については、縄タタキが見られ、表面には砂が付着している。98と99は、凸面のタタキ目をヘラ削りで消している。第5次調査では、ヘラケズリのほか、ナデによって消すものも報告されている。また、丁寧に完全に消すものとそうでないものがあり、ナデは多くが横方向に、ヘラケズリは縦方向に施されている[1]。平成22年に名古屋市教育委員会が実施した第14次調査では、叩き消しの割合が非常に高いと報告されている[2]。

102・103は、叩き板に正格子タタキと花文を彫り込んだ特殊なタタキである。花文は、横から見た蓮を現した文様で、格子と花文は別々ではなく、同じ叩き板に彫り込んでいる。102と103の花文を比較すると、同じ叩き板によるものであるとの判断はできなかった。花文のあるタタキをもつ瓦は尾張元興寺跡の他、名古屋市昭和区にある極楽寺跡[3]からも出土していることが知られている。

焼成については、平行・格子タタキは須恵質の瓦が多く、縄タタキの瓦は赤褐色が多い傾向にあった。以上の観察をもとに過去の調査例と併せて分類を行うと、桶巻き作りか一枚作りかを大区分とし、凸面タタキを細区分とすることで以下のとおり5つとなった。

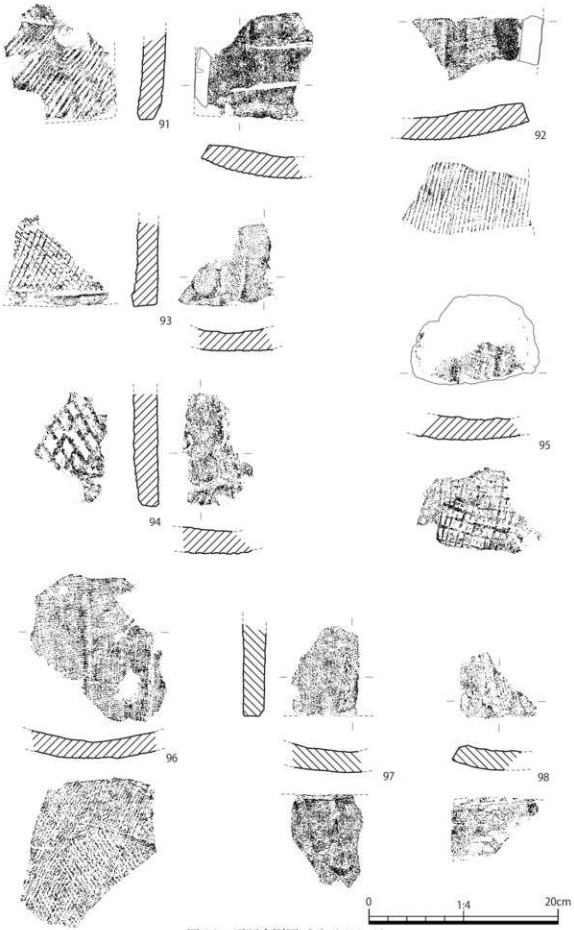


図39　平瓦実測図（1）（1：4）

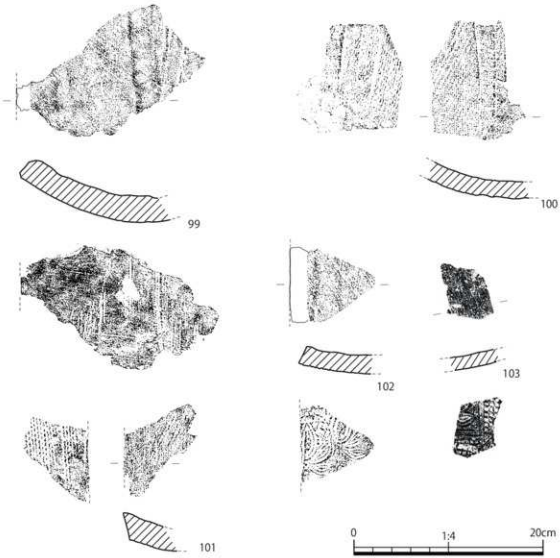


図 40　平瓦実測図（2）（1：4）

Ⅰ　桶巻き作り・平行タタキ

Ⅱ　桶巻き作り・格子タタキ

Ⅲ　桶巻き作り・縄タタキ（離れ砂なし）

Ⅳ　桶巻き作り・タタキナデ消し

Ⅴ　一枚作り・縄タタキ（離れ砂あり）

検討する資料が少なく、溝の埋土からの出土状況により瓦溜から出土する平瓦の構成とは異なると思われるが、Ⅳが多く確認され、一つの傾向を提示できたと思う。

註

1) 服部哲也 1992『尾張元興寺跡第 5 次調査の概要』名古屋市教育委員会

2) 市澤泰峰・角脇由香梨 2010『尾張元興寺跡第 14 次調査発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

3) 梶山勝 1984「極楽寺跡出土の平瓦」『名古屋市博物館だより』第 36 号

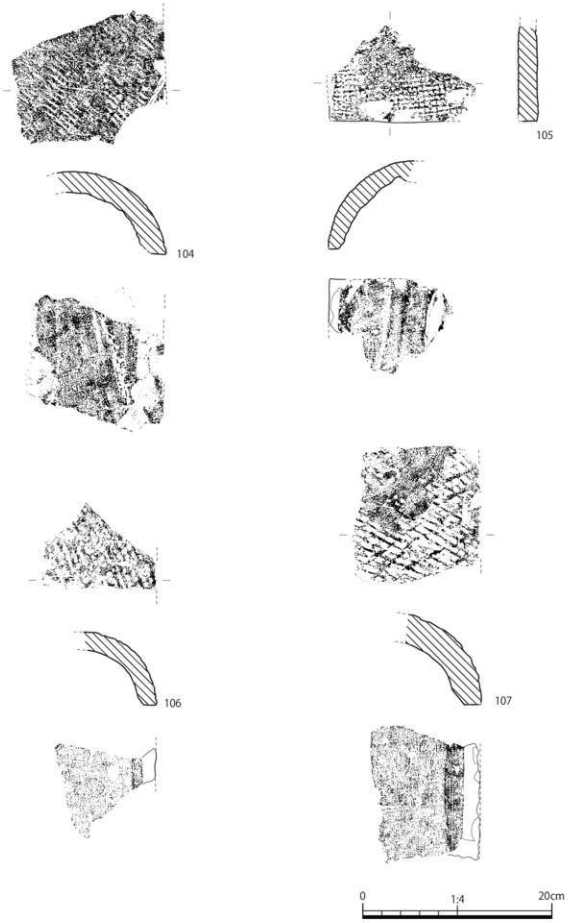


図 41　丸瓦実測図（1）（1：4）

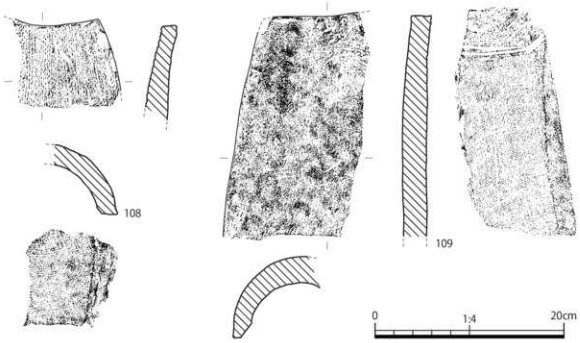


図 42　丸瓦実測図（2）（1：4）

丸瓦（図 41・42）

丸瓦の分類にあたっては、行基葺きか玉縁付を区分することが小破片のため、108 と 109 が行基葺きである以外は判断できなかった。尾張元興寺跡から出土する丸瓦は、凸面の調整は刻線の叩き板と縄巻きの叩き板に大別できるが、109 のような縄タタキを施した後に一部をナデ消してしまう瓦が 58％を占めている。104 に示したような平行タタキが 12％である。105 ～ 107 は、格子タタキであり 10％を占め、正格子・斜格子・菱形に近い 3 種類に細分できる。108 は縄タタキで 20％である。丸瓦の総量は合計 73 点である。成形台については、109 の丸太状の木型以外は詳らかでない。

鴟尾（図 43）

鴟尾と思われる厚手の破片が 4 点出土した。部位については不明である。線刻や突帯は確認できないので腹部付近の破片と推測している。2 の破片には平坦面が確認できる。方形スカシ孔の一部であろうか。4 は、ヘラ切による端面が 2 面存在し、鰭部の可能性が高い。いずれも焼成は、土師質で灰白色を呈している。

図 43　出土鴟尾

参考文献

猪熊兼勝・大脇潔・松本修自・津村広志 1980『日本の鴟尾』飛鳥資料館
大脇潔 1999『日本の美術№ 392 鴟尾』至文堂

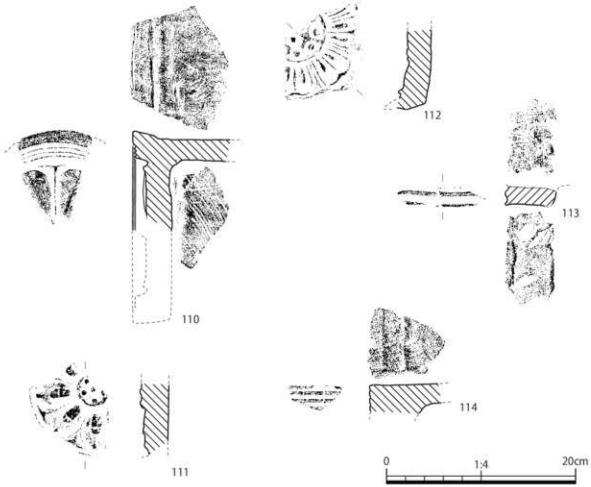


図 44　軒丸瓦・軒平瓦実測図 (1 ： 4)

軒瓦（図 44）

尾張元興寺跡から出土する軒瓦は、軒丸瓦 9 種 12 笵、軒平瓦 5 種が確認されている。

110 は、外縁は幅 1.2cm の素文部分があり、その内側に三重圏が認められる。蓮華文は素弁で、弁数は破片から復元すると 8 葉となる。間弁は「T」字形である。重圏単弁 8 葉の軒丸瓦Ⅲ型式に該当する。焼成は瓦質である。尾張元興寺から出土する軒丸瓦の半数を占める型式である。111 は、弁内に単子葉を配する所謂「山田寺式」である。尾張元興寺軒丸型式でいう重圏縁単弁蓮華文に該当する。外縁部は欠損する。重弁の子葉は立体的に表現されているので、軒丸瓦Ⅴa 型式となる。焼成は、瓦質である。ⅡB 区 SD103 出土である。112 は、外縁が欠損するが、複弁をもつ「川原寺式」の蓮華文軒丸瓦である。軒丸瓦Ⅶ型式に該当する。113 は、重弧文軒平瓦の段顎の下部分である。軒平瓦Ⅲ型式にあたる。114 は、軒平瓦で簾状押し引きであるが、段顎部分が欠損するため凸面の調整は不明であった。型式は判断できなかった。

参考文献

梶原義実 2013「第 1 節　出土瓦からみた尾張元興寺」『新修名古屋市史資料編考古 2』名古屋市
川合剛・服部哲也・尾野善裕 1992『尾張元興寺跡第 5 次調査の概要』名古屋市教育委員会

表 4　遺物観察表

立会調査

報告書番号	調査区	遺構	種別	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
					口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				
1	試掘1 トレンチ	西壁1or2層	陶器	壺	4.3	4.8	—	密	良好	釉 7.5Y4/3 暗オリーブ色と 10YR7/2 にぶい黄橙色 胎土 10YR8/2 灰白色	内外面共に施釉
2	試掘2 トレンチ	排土	陶器	壺	2.8	6.6	3.6	密	良好	2.5YR/2 灰白色	口縁ヨコナデ、体部はロクロナデ、外面下部は回転ヘラケズリ。底部は円盤充填 外面に赤色顔料付着
3	試掘2 トレンチ	南壁3層	陶器	椀	—	5.5	7.6	密	良好	釉 10YR2/2 黒褐色 胎土 10YR7/3 にぶい黄橙色	高台部分以外内外面共に施釉 高台はロクロケズリ
4	試掘4 トレンチ	排土	瀬戸	火鉢（破片）	—	—	—	密	良好	釉 5Y7/2 灰白色と 7.5YR3/4 暗褐色 胎土 2.5YR/1 灰白色	内外面共に施釉 外面に彫り込み文様あり

本発掘調査

報告書番号	調査区	遺構	種別	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
					口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				
1	I 区	SK01	磁器	端反椀	8.6	4.8	3.4	密	良好	釉 N8/0灰白色 胎土 5YR/1灰白色	内外面共に施釉・蛇足文（？）
2	I 区	SK01	陶器	輪花皿	13.1	3.4	6.1	密	良好	釉5YR/2	内外面共に施釉
3	I 区	SK01	木製品	荷札木簡	2.7	15.0	0.4～0.5	-	-	-	表「御代官一色庄左衛門」　裏「相馬新田二新二郎」
4	I 区	SK01	木製品	荷札木簡	3.1	16.7	0.3～0.4	-	-	-	表「御代官田水清○○○」　裏「納四（貫）（人）○○○」
5	I 区	SK02	磁器	箱形湯呑	5.3	5.3	3.8	密	良好	釉 10GY8/1明緑灰色 胎土10YR7/1灰白色	内外面共に施釉　外面菊花文　内面は輪線と見込に花文　底部にも輪線
6	I 区	SK02	磁器	丸椀	11.4	6.1～6.2	4.7	密	良好	釉 5GY8/1灰白色	内外面共に施釉
7	I 区	SK02	磁器	丸椀	11.8	6.4	5.0	密	良好	釉 7.5GY8/1明緑灰色	内外面共に施釉
8	I 区	SK02	磁器	広東椀	11.6	6.3	6.2	密	良好	釉 N8/0灰白色 胎土 N8/0灰	内外面共に施釉 外面草木文　内面草文？
9	I 区	SK02	磁器	広東椀	11.0～11.2	5.7～5.8	5.7	密	良好	釉 5Y7/2白色 胎土 5Y8/2灰白色	内外面共に施釉 外面宝珠文　内面五弁花文
10	I 区	SK02	陶器	椀	10.6	6.3	-	密	良好	釉 7.5YR/1灰 胎土 2.5YR/2灰白色	内外面共に施釉 外面に草文
11	I 区	SK02	陶器	擂鉢	34.3	12.8	16.3	やや粗	良好	5YR3/3暗赤褐色 胎土10YR8/3浅黄橙色	口縁ヨコナデ、体部外面は回転ヘラケズリ後ロクロナデ　内面はロクロナデ後擂り目（1単位16条　底部は円形）底部に糸切痕
12	I 区	SK03	磁器	広東椀	10.8	6.0	6.0	密	良好	釉 7.5GY8/1明緑灰色 胎土 N8/0灰白色	内外面共に施釉 外面コウモリと寿文　内面寿文
13	I 区	SK03	陶器	染付皿	12.8	3.1	6.0	密	良好	釉 5Y8/2灰白色 胎土 2.5Y8/2灰白色	内外面共に施釉 内面に五弁花文　扇文など
14	I 区	SK03	瓦	軒丸瓦	30.0	-	-	やや粗	良好	N3/0暗灰色	瓦当丸瓦部分は三つ巴文に珠文12個、平瓦部分は均等唐草文 巴面はヘラミガキ
15	I 区	SI101	土師器	高杯（脚）	-	8.5	15.4	密	やや軟	7.5YR8/4浅黄橙色 一部7.5YR8/2灰白色	摩滅の為調整不明　円形スカシ孔2ヵ所残存（4ヵ所に入るか？）

報告書番号	調査区	遺構	種別	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
					口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				
16	Ⅰ区	SI101	土師器	〈字状口縁甕	16.8	8.5	-	密	良好	外 7.5YR5/4 にぶい褐色 内 7.5YR7/4 にぶい橙色	口縁はヨコナデ　内面と外面体部はハケ目（摩滅の為不明瞭）3片から復元した
17	Ⅰ区	SI102	土師器	杯	13.2	4.0	-	密	良好	5YR6/6 橙色 内面一部 7.5YR2/1 黒色	口縁端部はヨコナデ　内面はナデ後ミガキ　外面底部は指オサエ
18	Ⅰ区	SI102	土師器	高杯	21.0	6.2	-	やや粗	良好	外 2.5YR6/6 橙色 内 7.5YR7/4 にぶい橙色	口縁端部はヨコナデ　内外面ともナデ
19	Ⅰ区	SI102	土師器	高杯	21.0	5.8	-	粗	良好	外 10YR5/3 にぶい黄橙色 内 5YR6/4 淡橙色	口縁端部はヨコナデ　内外面ともハケ目？　摩滅の為調整不明瞭
20	Ⅰ区	SI102	土師器	高杯（脚）	-	3.0	8.8	やや粗	良好	5YR6/6 橙色	外面ナデ　内面摩滅の為調整不明
21	Ⅰ区	SI102	土師器	高杯（脚）	-	5.6	8.4	密	良好	5YR7/8 橙色	内外面脚部分はナデ　端部はヨコナデ　内面上部はヘラケズリ
22	Ⅰ区	SI102	土師器	台付甕（脚）	-	3.9	-	粗	良好	7.5YR5/4 にぶい褐色	脚内外面はハケ目
23	Ⅰ区	SI102	土師器	〈字状口縁甕	14.4	11.3	-	やや粗	良好	外 7.5YR6/3 にぶい褐色 内 7.5YR8/3 淡黄橙色	口縁ヨコナデ　外面は摩滅の為調整不明（ハケ目か？） 内面はヘラケズリ2片から復元
24	Ⅰ区	SI102	須恵器	杯蓋	-	1.1	-	密	良好	外 2.5Y7/1 灰白色 内 2.5Y8/1 灰白色	外面回転ヘラケズリ　内面ロクロナデ
25	Ⅰ区	SI102	須恵器	甕	-	5.2	-	密	軟	外 2.5YR6/1 灰白色 内 2.5Y7/2 灰黄色	外面平行タタキ後ヨコハケ　上部はヨコナデ内面ナデ
26	Ⅰ区	SI102	須恵器	甕	-	8.4	-	密	良好	2.5Y6/1 黄灰色	外面平行タタキ　内面ナデ
27	Ⅰ区	SI102	須恵器	甕	-	2.1	-	密	良好	N6/0 灰色	外面平行タタキ　内面ナデ
28	Ⅰ区	SI102	須恵器	甕	-	10.4	-	密	良好	外 2.5Y5/1 黄灰色 内 2.5Y6/1 黄灰色	外面平行タタキ　内面ナデ
29	Ⅰ区	SK102	土師器	杯	13.8	3.8	-	やや粗	良好	外 7.5YR5/4 にぶい褐色 内 5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁ヨコナデ　外面指オサエ（不明瞭）　内面ナデ
30	Ⅰ区	SK102	土師器	杯	14.8	4.2	-	やや粗	軟	5YR7/6 橙色	摩滅の為調整不明
31	Ⅰ区	SK102	土師器	高杯	20.6	5.0	-	やや粗	良好	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁ヨコナデ　外面ハケ目（不明瞭）　内面ナデ
32	Ⅰ区	SK102	須恵器	杯	-	0.8	-	密	良好	N5/0 灰色	外面回転ヘラケズリ　底面は後ナデ　内面ロクロナデ　底部ナデ
33	Ⅰ区	SK102	須恵器	甕	-	11.6	-	密	軟	5Y8/1 灰白色	外面平行タタキ後沈線　内面ナデ
34	ⅡA区	SD01	灰釉	輪花皿	10.1	2.75	5.5	密	良好	釉 5Y7/3 浅黄色 胎土 2.5Y7/2 灰黄色	全体に施釉　内外面ともロクロナデ　高台は回転ヘラケズリ 内面の釉は輪状にかきとり
35	ⅡA区	SD01	志野	丸皿	10.2	2.7	6.2	密	良好	釉 10YR8/1 灰白色 胎土 5Y8/1 灰白色	全体に施釉　外面体部は回転ヘラケズリ　高台はヨコナデ　底は無釉でロクロナデ
36	ⅡA区	SD01	瀬戸・美濃窯製品	天目茶碗	11.4	5.0	-	密	良好	釉 7.5YR3/3 暗褐色 胎土 2.5Y7/2 灰黄色	全体に施釉
37	ⅡA区	SD01	瀬戸・美濃窯製品	天目茶碗	-	1.6	4.3	密	良好	釉 10YR3/3 暗褐色 胎土 2.5Y8/2 灰白色	内面は施釉　高台はヨコナデ　底はロクロナデ
38	ⅡA区	SD01	瀬戸・美濃窯製品	鉄絵皿	-	1.1	6.4	密	良好	釉 5Y7/1 灰白色 胎土 10YR7/3 にぶい黄橙色	全体に施釉　内面に草文
39	ⅡA区	SD01	志野	丸皿	-	1.1	6.4	密	良好	釉 2.5Y7/2 灰黄色 胎土 2.5Y8/2 灰白色	全体に施釉　内外面にトチン痕3か所
40	ⅡA区	SD01	瀬戸・美濃窯製品	鉢	-	8.7	10.0	密	良好	釉 7.5Y8/2 灰白色 胎土 2.5Y8/2 灰白色	全体に施釉　底は無釉で回転ヘラケズリ外面には輪状文　内面にトチン痕
41	ⅡA区	SD01	美濃	鉄絵鉢	30.6	4.9	-	密	良好	釉 2.5Y6/1 黄灰色 胎土 10YR6/1 褐灰色	全体に施釉　内面に染付　内外面ともにロクロナデ　外面下部は回転ヘラケズリか？
42	ⅡA区	SD01	美濃	鉄絵皿	-	4.6	-	密	良好	釉 10YR7/2 にぶい黄橙色 胎土 2.5Y8/3 淡黄色	全体に施釉　内面に染付　外面下部は回転ヘラケズリか？ 高台はヨコナデ　底はロクロナデ

報告書番号	調査区	遺構	種別	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
					口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				
43	Ⅱ A区	pit64	須恵器	杯身	8.4	4.1	-	密	良好	N5/0 灰色	口縁ヨコナデ　内外面ロクロナデ　外面上部は回転ヘラケズリ
44	Ⅱ A区	pit30	弥生土器	楕形高杯	10.3	8.9	13.8	密	良好	10YR8/4浅黄橙色 高台内面10YR6/1褐灰色	外面と杯内面はミガキ　高台内面はナデ（一部工具によるナデか？） 高台には円形スカシ孔が3ヵ所に入る　脚端部はヨコナデ
45	Ⅱ A区	pit38	手づくね土器	ミニチュア壺	3.2	4.2	-	密	良好	7.5YR8/4浅黄橙色	口縁ヨコナデ　外面は指オサエ　内面上部はナデ　下部は未調整か？
46	Ⅱ A区	pit44	須恵器	無蓋高杯	12.8	5.3	-	密	良好	5Y6/1灰色	口縁ヨコナデ　内外面ともにロクロナデ　外面下部は回転ヘラケズリ
47	Ⅱ B区	包含層	土師器	皿	14.0	3.0	-	密	良好	9Y7.5YR7/4にぶい橙色 内7.5YR5/3にぶい褐色	口縁ヨコナデ　内外面ともにロクロナデ　外面下部はヘラケズリか？
48	Ⅱ B区	SD103	須恵器	杯身	12.8	3.6	-	密	良好	2.5Y6/1黄灰色	口縁ヨコナデ　内外面ともにロクロナデ　底部には糸切痕
49	Ⅱ B区	包含層	須恵器	杯身	15.2	4.0	11.4	密	良好	10YR5/2灰黄褐色	口縁ヨコナデ　内外面ともにロクロナデ　高台は丸ヨコナデ　底部は回転ヘラケズリ
50	Ⅱ B区	包含層	須恵器	高杯	-	3.3	-	密	良好	9.5N5/0灰色～部N7/0灰白色 杯内面7.5Y4/1灰色 脚内面N4/0灰色	杯内面はロクロナデとナデ　外面はヘラケズリ　脚外面はロクロナデ 内面はロクロナデ　上部は未調整で絞り痕あり
51	Ⅱ B区	魔乱	須恵器	高杯	11.4	6.3	-	密	良好	9Y7.5Y5/1灰色 内N5/0灰色	口縁ヨコナデ　内外面ともにロクロナデ　底部分はナデか 外面一部回転ヘラケズリ外面に波状文　全体に灰かぶり
52	Ⅱ B区	包含層	須恵器	甕（口縁）	-	4.1	-	密	良好	9N7/0灰白色 内5Y7/1灰白色	口縁ヨコナデ　内外面ともにロクロナデ　外面に刺突文入る
53	Ⅱ B区	包含層	須恵器	鉢	-	7.4	-	密	良好	9.2.5Y6/1黄灰色 内N4/0灰色	口縁ヨコナデ　外面は平行タタキ　内面はロクロナデ　全体に灰かぶり
54	Ⅱ B区	SI103	土師器	甕（口縁）	14.3	1.7	-	密	良好	5YR7/6橙色	口縁ヨコナデ　外面はナデ　内面はハケ目
55	Ⅱ B区	SI103	土師器	受口手鉢（口縁）	-	1.8	-	密	良好	10YR8/2灰白色	摩滅の為調整不明　内面はナデか？
56	Ⅱ B区	SI103	土師器	くず状口縁甕	16.0	5.2	-	粗	軟	10YR7/3にぶい黄橙色	摩滅の為調整不明　体部外面はハケ目か？
57	Ⅱ B区	SI103	土師器	台付甕	-	6.9	9.0	粗	良好	9x10YR6/3にぶい黄橙色 内7.5YR7/4にぶい橙色	全体的に摩滅している　外面はハケ目
58	Ⅱ B区	SI103	土師器	台付甕	-	4.3	-	粗	良好	5YR6/6橙色 内面10YR6/3にぶい黄橙色	全体的に摩滅している　外面はハケ目　高台内面はしぼり痕？
59	Ⅱ B区	SI103	土師器	台付甕	-	2.3	-	やや粗	良好	9x10YR5/2灰黄褐色 内10YR7/2にぶい黄橙色	外面はハケ目　内面は摩滅の為調整不明
60	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	高杯	-	7.8	-	密	軟	9x2.5YR7/4浅赤橙色 内10YR8/3浅黄橙色	摩滅の為調整不明　内面に放射状の工具痕わずかに残る 脚部外面はミガキ（不明瞭）脚部接合部分には工具痕
61	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	高杯（脚）	-	7.1	-	密	良好	10YR7/2にぶい黄橙色	外面はミガキ　内面上部未調整　下部はナデで部分的に指オサエか？　円形スカシ孔3ヵ所
62	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	高杯（脚）	-	5.8	-	密	良好	9x5YR6/6橙色 内7.5YR6/6橙色	外面は摩滅の為調整不明　工具痕がわずかに残る　内面はハケ目 上部は未調整杯部分は剥離か？
63	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	楕形高杯	-	6.2	-	密	良好	9x10YR8/3浅黄橙色 内10YR8/2灰白色	内外面共にナデか？（摩滅している）杯内面には放射状の工具痕
64	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	高杯(脚)	-	4.2	12.8	やや粗	良好	9x10YR6/3にぶい黄橙色 内5YR7/6橙色	外面はミガキ　内面はハケ目　スカシ孔は2段に入り、上方は直径1.2センチの円形スカシ孔4ヵ所　下方は直径0.7センチの円形スカシ孔4ヵ所に入る
65	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	器台	-	5.9	-	密	良好	9x10YR8/2灰白色 内2.5YR8/4浅黄橙色	外面上部はナデか？　脚部外面はミガキ　内面はナデ 円形スカシ孔3ヵ所に入る　全体的に摩滅している
66	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	器台	9.7	10.0	-	密	良好	5YR7/6橙色	杯部外面は横方向のミガキ　内面は放射状のミガキ 脚部外面は縦方向のミガキ　内面はナデ　上部に絞り痕　下部にハケ目種の痕跡
67	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	有段高杯	-	7.0	-	やや粗	良好	9x7.5YR8/4浅黄橙色 内7.5YR6/6橙色	口縁端部ヨコナデ　外面はミガキ（摩滅の為不明瞭）
68	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	蓋	12.4	5.6～5.7	-	密	良好	7.5YR6/4にぶい橙色	口縁端部ヨコナデ　内外面共にミガキ　つまみ部分外面はナデ 内面はヘラケズリ　端部に圧痕数が所あ(又残存少なくロ径は推定値)
69	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	壺（口縁）	10.6	4.0	-	やや粗	良好	9x7.5YR6/4にぶい橙色 内7.5YR3/1黒褐色	口縁内外面共にナデ　端部に指オサエ

報告書番号	調査区	遺構	種別	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
					口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				
70	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	大型の台		4.5	23.2	やや粗	良好	7.5YR7/6橙色	全体的に摩滅　外内面共にミガキ　上部はナデ　円形のスカシ孔4ヵ所（3ヵ所残存）
71	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	壺（口縁）	16.0	6.1	-	密	良好	外7.5YR7/3にぶい橙色 内10YR5/1褐灰色	口縁端部ヨコナデで内面に工具痕、外面はナデ、内面はハケ目 体部外面はハケ目　内面はナデ　頸部内面は工具によるナデ
72	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	有段壺（口縁）	15.8	4.8	-	密	良好	2.5Y7/1灰白色	口縁端部ヨコナデ　外面はタテハケ　内面はヨコハケ　体部内面はナデ　全体に赤色顔料付着
73	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	有段壺（口縁）	15.2	6.5	-	密	良好	5YR7/6橙色	口縁端部はヨコナデ　外面はハケ目か？　内面は工具によるナデか？ 体部外面は摩滅の為調整不明（ナデか？）　内面は指オサエ
74	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	有段壺（口縁）	16.4	5.3	-	密	良好	外10YR7/2にぶい黄橙色 内10YR6/1褐灰色	全体的に摩滅の為調整不明瞭　口縁ヨコナデ　外面はハケ目 内面はナデ全体に赤色顔料付着
75	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	甕（S字状口縁甕）	17.4	3.1	-	密	良好	10YR8/2灰白色	口縁ヨコナデ　頸部外面に工具痕　内面は工具によるナデ　体部外面は縦方向のハケ目 内面はヘラケズリ後指オサエ　口縁外面にスス付着56と同一個体か？
76	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	甕（S字状口縁甕）	20.8	2.5	-	密	良好	2.5YR8/1灰白色	口縁はヨコナデ　頸部外面に工具痕　内面は工具によるナデか　体部外面は縦方向のハケ目 口縁外面にスス付着
77	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	甕（S字状口縁甕）	16.2	8.7	-	密	良好	外10YR5/2灰黄褐色 内2.5YR/1灰白色	口縁ヨコナデ　外面は縦方向のハケ目後横方向のハケ目　頸部外面に工具痕　内面に指オサエ 内面は摩滅しているが工具によるナデか？外面にススが付着　57と同一個体か？
78	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	く字状口縁甕	15.4	7.0	-	やや粗	軟	外7.5YR8/4浅黄橙色 内2.5Y7/2灰黄色	口縁はヨコナデ後外面はタテハケ　内面はヨコハケ　体部外面は不定方向のハケ目 内面は摩滅している　外面にススが付着
79	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	甕（口縁）	24.6	6.3	-	密	良好	外7.5YR6/4にぶい橙色 内7.5YR7/4にぶい橙色	口縁端部ヨコナデ　外面はハケ目後ナデ　内面は工具によるナデ　体部内面はヘラケズリ 外面にススが付着
80	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	く字状口縁甕	21.2	16.8	-	粗	軟	外7.5YR7/4にぶい橙色 内10YR7/3にぶい黄橙色	口縁はヨコナデ　外面はヘラケズリと下方に粗いハケ目か？ 外面頸部には工具のような圧痕あり 内面は摩滅の為調整不明
81	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	壺（底部）	-	2.8	7.1	密	良好	外5YR5/8明赤褐色 内5YR6/8橙色 底部分N3/0暗灰色	内外面共にミガキと思われるが単位は不明　底部は摩滅の為調整不明
82	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	壺（底部）	-	2.6	6.4	密	良好	外10YR7/3にぶい黄橙色 内2.5Y7/6橙色	全体的に摩滅の為調整不明瞭　外面はナデか？内面はヘラケズリか？ 底面には何らかの圧痕見られる
83	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	壺（底部）	-	3.6	7.6	密	良好	外10YR7/3にぶい黄橙色 一部7.5YR6/6橙色 内10YR6/1褐灰色	外面はヘラケズリか？（不明瞭）内面はハケ目　底部は未調整で築胴のような圧痕あり
84	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	壺（底部）	-	4.0	6.6	密	良好	7.5YR7/4にぶい橙色	外面はミガキか？（単位不明瞭）内面は工具によるナデか？外面には赤色顔料付着
85	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	台付甕（台部）	-	4.0	8.3	密	良好	外10YR4/2灰黄褐色 内7.5YR7/2明黄灰色	摩滅の為調整不明瞭 剥離部分に成形時の指痕見られる
86	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	台付甕（台部）	-	5.1	8.7	やや粗	良好	外7.5YR7/3にぶい橙色 内高台7.5YR6/4にぶい橙色 甕部分10YR5/3にぶい黄褐色	外面は摩滅の為調整不明瞭　高台内面はハケ目と指オサエ 甕内面は不明瞭だが放射状の工具痕あり
87	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	台付甕（台部）	-	4.4	7.6	密	良好	外7.5YR4/3褐色 内高台5YR5/6明赤褐色 甕10YR8/3浅黄橙色	内外面共にナデ
88	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	台付甕（台部）	-	2.4	-	密	良好	外10YR8/1灰白色 内10YR7/2にぶい黄橙色	外面はタテハケ　甕内面は摩滅の為調整不明　台内面はナデ
89	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	台付甕（台部）	-	3.1	-	密	良好	10YR8/2灰白色	外面はタテハケ　甕内面は摩滅しているがナデか？　台内面はナデ（摩滅している）
90	Ⅱ B区	SI104	弥生土器	台付甕（台部）	-	5.0	9.2	密	良好	10YR7/3にぶい黄橙色	台端部はヨコナデ　外面はタテハケ　甕内面はナデ　台内面はナデ

報告書番号	調査区	遺構	種別	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
					口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				
91	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（平行タタキ）	10.7	11.1	1.5～2.3	やや粗	良好	N6/1灰色	凹面は布目（密）　端部はヘラケズリ
92	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（平行タタキ）	13.5	-	2.0～2.7	やや粗	良好	10YR8/2灰白色	凸面は平行タタキ　凹面は布目（密）　端部はヘラケズリ
93	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（斜格子タタキ）	8.1	9.2	1.9～2.7	やや粗	良好	2.5Y7/1灰白色	凸面斜格子タタキ　凹面布目（密）　端部はヘラケズリ
94	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（斜格子タタキ）	8.3	12.5	2.1～2.6	やや粗	軟	10YR8/2灰白色	凸面斜格子タタキ　凹面布目（密）　摩滅の為残存わずか端部はヘラケズリ
95	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（斜格子タタキ）	13.1	8.9	1.9～2.2	密	軟	2.5Y8/1灰白色	凸面斜格子タタキ　凹面布目（密）
96	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（縄タタキ）	13.9	-	1.7～2.1	やや粗	良好	2.5Y7/2灰黄色	凸面は工具によるナデ後縄タタキ　凹面は布目（密）
97	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（ヘラケズリ）	7.6	9.9	2.1～2.5	やや粗	良好	5Y6/1灰色	凸面はヘラケズリ　凹面は布目（密）　コビキ痕あり端部はヘラケズリ
98	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（ヘラケズリ）	7.6	5.9	1.8～2.1	やや粗	良好	10YR8/3浅黄橙色	凸面はヘラケズリ　凹面は布目（密）　端部はヘラケズリ
99	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（ヘラケズリ）	16.0	-	2.4～2.9	やや粗	良好	2.5Y7/2灰黄色	凸面はヘラケズリ　凹面は布目（密）　コビキ痕あり端部はヘラケズリ
100	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（縄タタキ　砂付着）	10.8	-	1.6～1.9	やや粗	良好	5Y6/1灰色	凸面は縄タタキ（砂付着）指圧痕あり凹面布目（密）コビキ痕あり
101	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（縄タタキ　砂付着）	5.8	-	2.4	密	良好	5Y7/1灰白色	凸面は縄タタキ（砂付着）凹面は布目（密）コビキ痕あり端部はヘラケズリ
102	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（花文タタキ）	8.1	-	1.9～2.0	密	良好	2.5YR5/4にぶい赤褐色	凸面は花文タタキ　凹面は布目（密）　コビキ痕あり端部はヘラケズリ
103	Ⅱ A区	SD01	瓦	平瓦（花文タタキ）	4.7	7.1	1.5	やや粗	軟	5YR7/6橙色	凸面は花文タタキ　凹面は摩滅のため不明瞭
104	Ⅱ A区	SD01	瓦	丸瓦（平行タタキ）	11.7	-	2.2～2.5	やや粗	良好	凸面7.5YR6/6橙色凹面面10YR8/3浅黄橙色	凸面は平行タタキ　凹面は布目（密）布縫ぎ痕あり端部はヘラケズリ
105	Ⅱ A区	SD01	瓦	丸瓦（格子タタキ）	9.9	10.6	1.5～2.1	やや粗	良好	2.5Y8/1灰白色	凸面は格子タタキ　凹面は布目（密）　端部はヘラケズリ
106	Ⅱ A区	SD01	瓦	丸瓦（格子タタキ）	7.8	-	1.9～2.0	やや粗	良好	10YR8/3浅黄橙色	凸面は格子タタキ　凹面布目（密）　端部はヘラケズリ
107	Ⅱ A区	SD01	瓦	丸瓦（格子タタキ）	8.3	-	2.8～3.0	やや粗	良好	2.5Y7/1灰白色	凸面は格子タタキ　凹面は布目（密）　端部はヘラケズリ
108	Ⅱ A区	SD01	瓦	丸瓦（縄タタキ）	7.0	-	1.9～2.1	やや粗	良好	5Y8/1灰白色	凸面は縄タタキ　凹面は布目（密）　端部はラケズリ、離れ砂付着
109	Ⅱ A区	SD01	瓦	丸瓦（ナデ消し）	9.4	23.4	1.9～2.7	やや粗	良好	凸面10YR6/3にぶい黄橙色凹面7.5YR7/4にぶい橙色	凸面は縄タタキ後ナデ消し　凹面は布目（密）端部はヘラケズリ
110	Ⅱ A区	SD01	瓦	軒丸瓦（素弁蓮華文八葉か？）	瓦当の直径推定20.2	瓦部分10.5瓦当10.5	瓦2.1～2.3瓦当2.5～2.7	密	良好	2.5Y6/1黄灰色	縁は重圏文凸面は平行タタキ後ナデ消し　凹面は布目（密）コビキ痕あり
111	Ⅱ B区	SD103	瓦	軒丸瓦（単弁八葉蓮華文）	-	8.3	2.4～3.0	密	軟	N6/1灰色	珠文5個残存
112	Ⅱ A区	SD01	瓦	軒丸瓦（複弁八葉蓮華文）	-	8.6	2.3～2.6	密	良好	5Y6/1灰色裏面5YR6/1灰褐色	珠文4個残存
113	Ⅱ B区	包含層	瓦	軒平瓦（重弧文）	-	1.9	5.3	やや粗	軟	N5/0灰色	上部は剥離している　外面は摩滅の為調整不明（ヘラケズリか？）
114	Ⅱ A区	SD01	瓦	軒平瓦（雛状押引重弧文）	-	3.1	瓦2.1瓦当は不明	やや粗	良好	N5/1灰色	凹面は布目（密）

第5章　まとめ

以上第2章から第4章にわたり、名古屋市中区正木四丁目に所在する尾張元興寺跡における、発掘調査の成果を遺構・遺物について報告した。その結果、弥生時代から江戸時代に至るまでの土地利用の様相を確認することができた。それは平成17年に調査地の東側における株式会社パスコが調査した地点の発掘成果を追認する形となった[1]。ここでは、今回の調査で得た成果を過去の周辺の調査成果も踏まえながら尾張元興寺跡の時代ごとの土地利用を述べることとする。

今回の調査では、弥生・古墳時代の竪穴建物を9棟、古代寺院創建前に営まれた集落跡の存在を本調査区においても確認できた。今回の調査でも瓦は出土するものの、寺の存在を裏付ける遺構は確認されなかった。今回の調査地は推定されている寺域より東へ800mの地点であり、中心伽藍の周りの付属施設といったような寺に関わる遺構の存在を想定したが、結果的には、具体的に証明する事はできなかった。出土した瓦から7世紀中葉から第3四半期に造営された寺院の存在が考えられる。

今回の調査で最大の成果は、ⅡA区1面においてのSD01である。その幅が6.2mで深さ2.1mの大溝である。東西方向に確認したが周辺の調査区では同様な規模の遺構は確認されていない[2]。

溝の規模や断面形状からその性格は、中世城館の堀と考えられる。近世から近代の包含層の下面（1面）で検出された。堀から出土した遺物には志野や瀬戸・美濃製品が認められたことから中世に掘削されたと考えている。埋土は一方向から斜めに堆積しており、古代の土器や瓦が含まれていることから周辺の土砂を用いての埋め戻しが推測される。周辺に古代寺院の遺構が今まで確認できなかったのは、城館の築城や破城の際の土地改変によるものと思われる。今後の調査により、堀の全貌から推定される城館の存在が明らかになることを期待したい。

Ⅰ区1面の近世遺構は、尾張元興寺跡の遺跡範囲の南に接し東西を通る佐屋街道に面して形成される町屋の存在を明示する。屋敷地を区画する遺構は認められなかったが、礎石や土間の存在から敷地内の一部を確認したと考えたい。

註

1) 岡本敦子 2006『平成17年度尾張元興寺跡発掘調査報告書（株式会社山忠マンション建築工事にかかる埋蔵文化財発掘調査）』株式会社山忠

2) 村木誠 2005『尾張元興寺跡第11次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

第６章　論考

（１）佐屋街道と尾張元興寺跡

佐屋街道は、佐屋路と呼ばれる東海道付属の迂回路であった。東海道の伝馬制が慶長６年（1601）に実施され、熱田（宮）宿と桑名宿の間は海路「七里の渡し」で結ばれた。その後、寛永 11 年（1634）、尾張藩初代藩主の徳川義直が、将軍家光の上洛時に佐屋街道を開設した。佐屋街道は、熱田宿から佐屋宿までの陸路で渡海を避けている。佐屋街道の歴史は、明治になっても明治天皇の往来などに使用されてはいたが、明治５年（1872）新東海道が定められその役目を終えた。

尾張元興寺跡においては、近世の佐屋街道が遺跡の南端部を東西に横断する。近世においては、佐屋街道の北が名古屋城下（古渡村）、南が熱田であり、街道脇には町屋が建てられていたことが『尾張名所図会』からもわかる。また、現在も金山新橋南交差点の南西には、文政４年（1821）の銘がある道標が立っている。

このことから、今回の調査でも近世の遺物の出土が予想され、また佐屋街道に面しているので屋敷地の痕跡が発見される可能性が高かった。調査の結果、屋敷地の区画を発見するには至らなかったが、土間や礎石と思われる石が発見されたことにより、屋敷の存在が明らかになった。

図 30-3 の荷札に書かれた「稲狐（いなこ）新田」は、尾張平野南部の木曽川から派生する筏川と鍋田川に挟まれた開拓地（愛知県弥富市稲荷崎付近か）にあたる。菊池利夫の『新田開発』[1] によれば、稲狐新田は元禄８年（1695）に開発されたようで、この荷札木簡の年代の上限を示している。なお「稲狐新田○新三郎」の未読文字については名古屋市教育委員会から「組」もしくは「頭」ではないかとご教示を得た。

「御代官一色庄左衛門」の墨書がある一色庄左衛門という人物は、安政６年（1859）に佐屋代官に就任し、文久２年（1862）まで務めていたことが史料 [2] から分かっている。これらの文字資料は、今後佐屋街道沿いに建てられた屋敷地の性格を研究するにあたり一資料となることを願いたい。

また、尾張元興寺跡に隣接する新尾頭１丁目遺跡の発掘調査でも、幕末から近代にかけての佐屋街道沿いの町家の廃棄土坑が発掘されている。報告書によれば、名古屋城下の竪三蔵通遺跡や白川公園遺跡の幕末の出土遺物と共通する点も多いが、瀬戸・美濃以外の産地の製品や、特殊な器種などは少ないという [3]。

最後に今後の調査において近世遺構がさらに解明されることを期待したい。

註

[1] 菊池利夫 1963『新田開発』至文堂

[2]「藩士名寄」第四冊『旧篷左文庫所蔵史料 140-4』徳川林政史研究所所蔵

[3] 縄縄茂・林田愛美 2023『埋蔵文化財調査報告書 97- 新尾頭１丁目遺跡』名古屋市教育委員会

（2）いわゆる「尾張元興寺跡」という遺跡について

江戸時代から古代寺院として認識されていた尾張元興寺は、出土する瓦から７世紀中葉の創建と考えられる尾張地域で最古の寺院である。

この地の学術的調査は、石田茂作が昭和元年（1926）に現地を訪れ、地籍図や出土瓦を調べている[1]。その頃すでに土壇も礎石も何一つ残っていない状況であったという。ただ、小栗鉄次郎の日誌（昭和 17 年９月 23 日）には「元興寺礎石、瓦の民家床下より発見せられた事の報告あり」と興味深い報告がされている[2]。この礎石については詳らかでない。石田は、元興寺および西隣の泰雲寺の所有地に注目し、両寺所有地の東西を走る道を手がかりに、東西 60 間余りの往時の尾張元興寺の寺域を想定した。昭和 50 年頃（1975 ～）から尾張元興寺や泰雲寺周辺は、マンションや商業ビルの開発が進み、発掘調査が継続的に実施されるようになった。

過去 21 ヵ所の発掘調査が実施された地点において伽藍の痕跡は発見されていない。唯一、平成 11 年（1999）に名古屋市教育委員会が実施した第７次調査で発見された水煙は、伽藍の存在を推定させる[3]。この水煙は地面に刺さった状態の破片２点であるが、水煙の端部先端が地中に向けて発見されたことは、塔の上から転落した結果であると思われ、その周辺に塔の存在を確定できる資料となる。出土地点は、かつて石田茂作が地籍図の地割や出土瓦の散布範囲から導き出した伽藍推定地内であった。また東西 110m、南北 160m の範囲の東寄りにあたる。これらのことから、塔が東に存在する法起寺式の伽藍配置と推定された。

また、近世の佐屋街道付近が寺域の南端にあたり、西側については、熱田台地の西辺に位置する。このことから寺に関わる施設は、地理的環境から推定寺域の西と南には考えることができない。そこで、北側と東側に関連遺構を求めると、北側では株式会社イビソクが実施した調査地点[4]と第 15 次調査[5]で掘立柱建物が見つかっている。推定する伽藍配置から離れるが、生活空間があったと思われる。東側にあたる今回の第 19 次調査では、寺の政所などの管理施設を推定した[6]が、残念ながら確認することはできなかった。

今回の調査によって発見されたⅡA 区の SD01（大溝）は城館等の施設であり、その存在から古代寺院の遺構は改変されて、消滅したものと推測する。

註

[1] 石田茂作 1936「尾頭元興寺」『飛鳥時代寺院址の研究』（財）聖徳太子奉賛会

[2] 梔山勝 2009『企画展小栗鉄次郎戦火から国宝を守った男』名古屋市博物館

[3] 服部哲也・鍵鑑茂ほか 2002「尾張元興寺跡７次発掘調査報告書」『埋蔵文化財調査報告書 40』名古屋市教育委員会

[4] 内田真一郎 2011『尾張元興寺跡発掘調査報告書』株式会社イビソク

[5] 樋田泰之 2015『尾張元興寺跡第 15 次発掘調査報告書』ナカシャクリエイティブ株式会社

[6] 大阪府羽曳野市の野々上遺跡では野中寺東に隣接して掘立柱建物などを確認し、寺に付属する建物と報告した。

河内一浩 1996『野々上Ⅱ　野々上遺跡平成６年度調査報告書（遺構編）』羽曳野市遺跡調査会

河内一浩 1996『野々上Ⅲ　野々上遺跡平成７年度調査報告書（遺構編）』羽曳野市遺跡調査会

河内一浩 1998『野々上Ⅵ　野々上遺跡出土遺物整理報告書』羽曳野市遺跡調査会

図　版

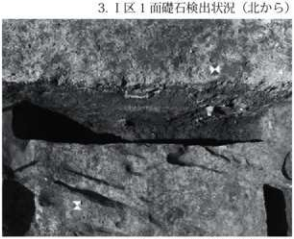
図版1 遺構

1. I区1面検出状況（南西から）

2. I区1面全景（南西から）

3. I区1面礎石検出状況（北から）

4. I区1面土間検出状況（北東から）


5. I区1面SK01近景（東から）

6. I区1面SK02近景（南から）

7. I区1面SK03土層断面（南から）

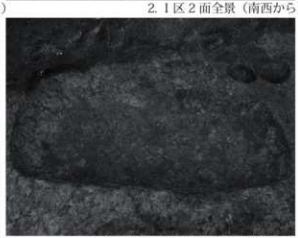
8. I区1面SK04土層断面（東から）

図版2 遺構

1. Ⅰ区2面全景（北から）

2. Ⅰ区2面全景（南西から）

3. Ⅰ区2面SD101土層断面（西から）



4. Ⅰ区2面SK101近景（南西から）

5. Ⅰ区2面SI101近景（東から）

6. Ⅰ区2面SI101pit111遺物出土状況（東から）

7. Ⅰ区2面SI102近景（北西から）

8. Ⅰ区2面SI102近景（南東から）

図版3 遺構

1. Ⅱ A 区 1 面検出状況（南から）

2. Ⅱ A 区 1 面全景（北西から）

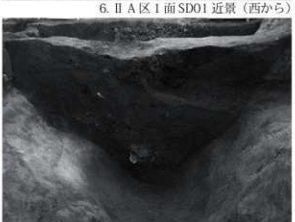
3. Ⅱ A 区 1 面 SD01 近景（東から）

4. Ⅱ A 区 1 面 SD01 近景（南東から）

5. Ⅱ A 区 1 面 SD01 全景（北から）

6. Ⅱ A 区 1 面 SD01 近景（西から）

7. Ⅱ A 区 1 面 SD01 全景（南から）


8. Ⅱ A 区 1 面 SD01 土層断面（西から）

図版4 遺構

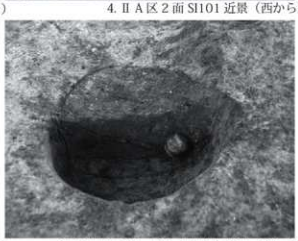
1. Ⅱ A 区 2 面 垂直写真（左が北）

2. Ⅱ A 区 2 面 全景（南から）

3. Ⅱ A 区 2 面 SI101 近景（南から）

4. Ⅱ A 区 2 面 SI101 近景（西から）

5. Ⅱ A 区 2 面 SI102 近景（西から）



6. Ⅱ A 区 2 面 pit38 土器出土状況（南から）

7. Ⅱ A 区 2 面 pit30 断面（南東から）

8. Ⅱ A 区 2 面 pit30 土器出土状況（南東から）

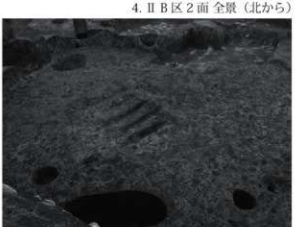
1. Ⅱ B 区 2 面 垂直写真（左が北）

2. Ⅱ B 区 2 面 全景（北西から）

3. Ⅱ B 区 2 面 全景（南西から）

4. Ⅱ B 区 2 面 全景（北から）

5. Ⅱ B 区 2 面 SI104 近景（東から）



6. Ⅱ B 区 2 面 SI104 近景（南東から）

7. Ⅱ B 区 2 面 SI105 近景（北東から）

8. Ⅱ B 区 2 面 SI107 近景（東から）

図版6 遺物

Ⅰ区1面 SK01

Ⅰ区1面 SK01

Ⅰ区1面 SK01

Ⅰ区1面 SK01

Ⅰ区1面 SK02

Ⅰ区1面 SK02

図版7 遺物

7
I区1面SK02

8
I区1面SK02

9
I区1面SK02

10
I区1面SK02

11
I区1面SK02

12
I区1面SK03

13
I区1面SK03

14
I区1面SK03

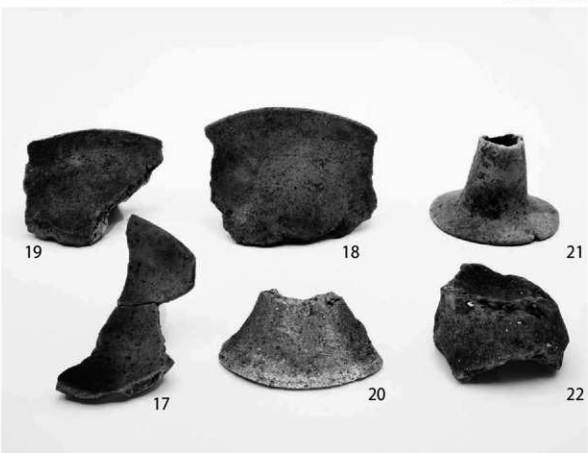
図版8 遺物

15

I区2面SI101

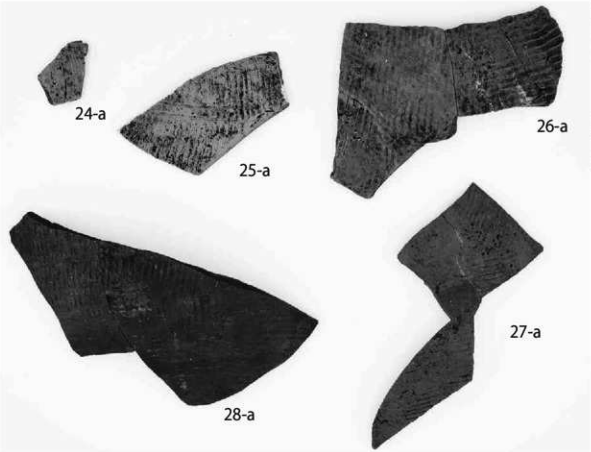
16

I区2面SI101

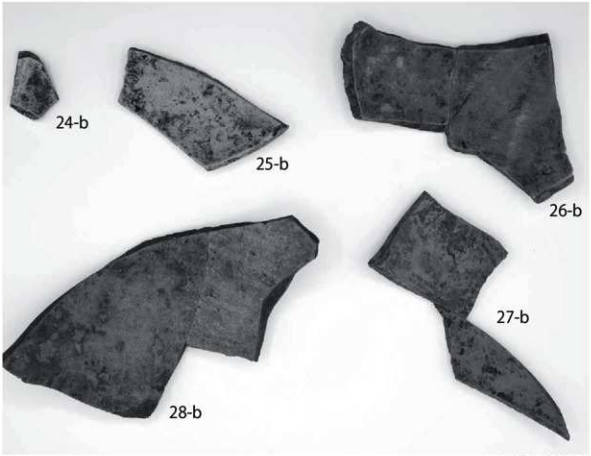


I区2面SI102

図版9 遺物

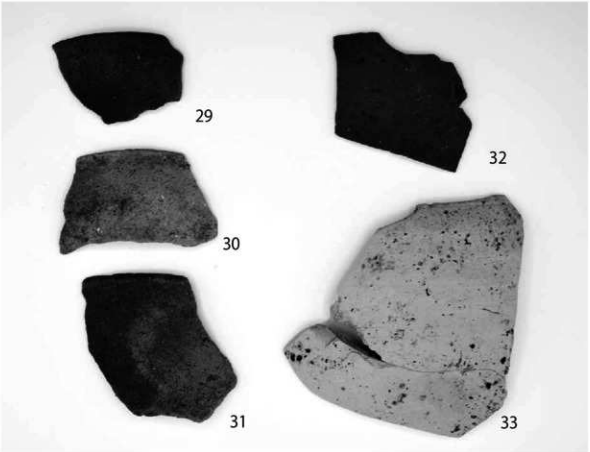


I区2面SI102



I区2面SI102

図版10 遺物



Ⅰ区2面SK102

ⅡA区1面SD01

図版11 遺物

43
Ⅱ A区 2 面 pit64

45
Ⅱ A区 2 面 pit38

44
Ⅱ A区 2 面 pit30

46
Ⅱ A区 2 面 pit44

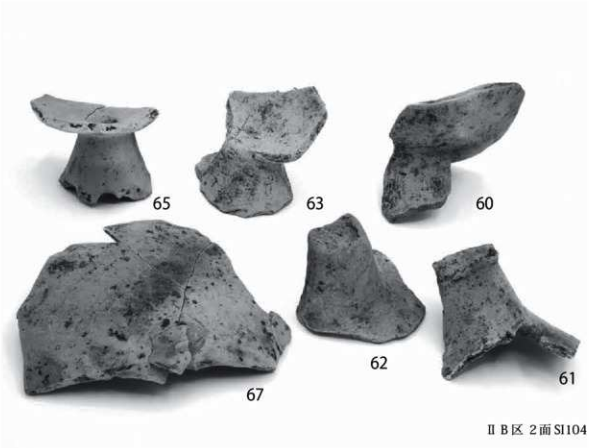
48
Ⅱ B区 2 面 SD103

51
Ⅱ B区 攪乱

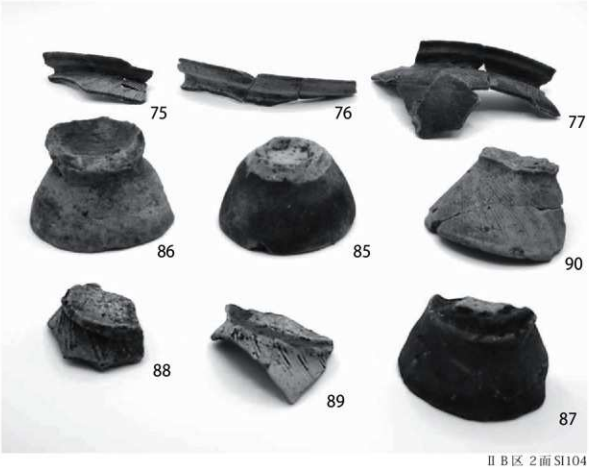
52
Ⅱ B区 包含層

53
Ⅱ B区 包含層

図版12 遺物

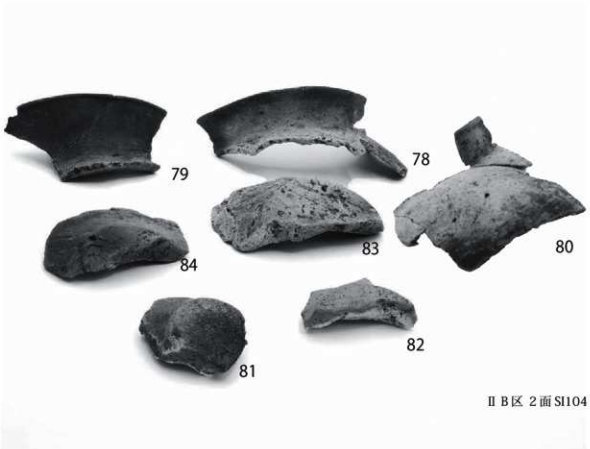


Ⅱ B区 2面SI104



Ⅱ B区 2面SI104

図版13 遺物



Ⅱ B区 2面SI104

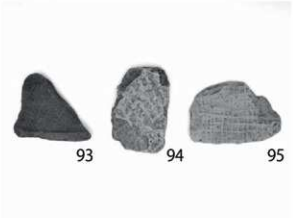
Ⅱ B区 2面SI104

Ⅱ B区 2面SI104

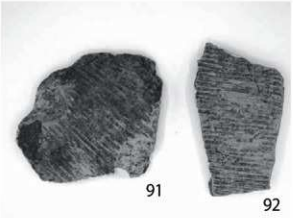
Ⅱ B区 2面SI104

Ⅱ B区 2面SI104

図版14 遺物



平瓦（斜格子・格子タタキ）

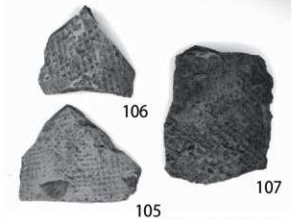


平瓦（平行タタキ）

平瓦（ヘラケズリ）

平瓦（縄タタキ）

平瓦（花文タタキ）



丸瓦（斜格子・格子タタキ）

丸瓦（平行タタキ）

丸瓦（縄タタキ）

図版15 遺物

丸瓦（縄タタキ・ナデ消し）

軒丸瓦Ⅲ型式

軒丸瓦Ⅴa型式
（ⅡB区2面SD103）

軒丸瓦Ⅶ型式

軒平瓦Ⅲ型式
（ⅡB区包含層）

軒平瓦型式不明

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おわりがんごうじあと　だい19じはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	尾張元興寺跡　第19次発掘調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	河内一浩・林　順
編 集 機 関	安西工業株式会社
所　在　地	兵庫県神戸市西区上新地３丁目３番１号
発 行 年 月 日	西暦２０２４年１０月３１日

所収遺跡名（ふりがな）	所　在　地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
尾張元興寺跡（おわりがんごうじあと）	名古屋市中区正木（なごやし なかく まさき）四丁目（ちょうめ）903	23106	7-22	35度08分34秒	136度53分52秒	2023年10月2日～2023年12月25日	353.5㎡	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尾張元興寺跡	集落 寺院跡	弥生時代	竪穴建物	弥生土器	調査では遺構の所在する面を２面確認した。１面の大溝はその規模から城館等の区画溝と考えられる。 遺物としては荷札木簡などの近世佐屋街道に付随する町屋の存在を明示する遺物が出土した。
		古墳時代	竪穴建物	土師器、須恵器	
		古代	掘立柱建物、溝	土師器、須恵器、瓦	
		中世	溝（大溝）	陶磁器	
		近世	土坑・礎石	陶磁器、瓦、荷札木簡 石硯、銭貨	

要　　約	尾張元興寺跡は熱田台地の西側に接し、古くから古代瓦が出土する遺跡として知られていた。昭和27年からはじまった発掘調査は22回にわたって行われてきたが、尾張地域の最古の寺院である以外、その全容は不明である。調査が進み寺以前の生活痕跡も確認するに至っている。今回の調査では古代瓦が出土したほか、弥生・古墳時代の建物を確認することができた。今後、区画溝の広がりや佐屋街道に関連する遺構や遺物の検討が必要であろう。

尾張元興寺跡-第19次発掘調査報告書-

2024（令和06）年10月31日

発　行
編　集
安西工業株式会社
〒651-2411　兵庫県神戸市西区上新地３丁目３番１号
℡:078-967-5530　fax:078-967-5536

印刷・製本
三星商事印刷株式会社
〒602-8358　京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
℡:075-467-5151　fax:075-467-5152

表紙カット
右上　川原寺式（軒丸瓦Ⅶ型式）　左下　山田寺式（軒丸瓦Ⅴａ型式）